

東方～二人の白狼天狗～

ふれんど

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

なんでこんなことになつたのか分からぬが、狼の靈に憑かれてしまつた白神 栄。あわてふためいている時に、八雲紫と名乗る女性が目の前に現れる。その人の話を聞き、栄は幻想郷という所に行くことにした……行つた先の幻想郷で、人間の時には体験できなかつた出来事や、今までとは違う人達にあつて変わつていつたり、幻想郷の現実を知つていく……そんな話です。栄の心の変化、変わつてどうなつていくのか、見ていただければ嬉しいです！

（基本は終視点のつもりですが、変わつてたりしたらすみません）

文（ぶん）がおかしくなる可能性があること、残酷な描写がふくまれること、気分によつてはR—15も含まれるかもしれませんのでそこも、そして主人公はオリジナルであり、主人公は女子です。この4つを注意して下さい。

最初の頃に書いた書き方が、最新話にいくにつれて、だんだんと変わつております。

よろしければ、最初だけで終わらず、最新話まで読んでいただければ、ありがたいです。

【重要】追記・序盤のほうは、感想への返信をさせていただいておりますが、これからは、感想をいただいても、返信はしないつもりです。あらかじめご了承ください。

目 次

序章～終わりと始まり～	1
序章式～終わりと始まり～	4
壹巻～妖怪の山と天狗～	9
式巻～新たな出会い～	13
参巻～幻と現～	16
肆巻～災厄の予兆～	19
伍巻～信じるべき事～	22
陸巻～無力の闇～	25
漆巻～能力の目覚め～	28
捌巻～強者～	31
玖巻～吉か凶か～	34
拾巻～奇妙な出来事～	37
拾壹巻～幻想郷の情報屋～	41
拾式巻～怒りのさなか～	45
拾參巻～特別訓練～	48
拾肆巻～裏～	52
拾伍巻～柾の想い～	55
拾陸巻～出会いの連鎖～	60
拾漆巻～一つの過去～	63
拾捌巻～繰り返される夢『回夢』～	66
拾玖巻～心の箱の知らない事実～	70
式拾巻～変化～	79
式拾壹巻～崩れた過去～	82
式拾式巻～奇妙な出来事～	85

式拾参巻～山の治安～	
式拾肆巻～真相～	
式拾伍巻～踏み入れた時～	
式拾陸巻～恐怖～	
【番外編】～冬の月夜に二人の白狼天狗～	
式拾漆巻～攻守交代～	
式拾捌巻～進退～	
式拾玖巻～解明～	
参拾巻～動き出す歯車～	
参拾壹巻～無力～	
参拾弐巻～未來～	
参拾参巻～疑い～	
参拾肆巻～罪とは～	
参拾伍巻～助け合い～	
参拾陸巻～空～	
参拾漆巻～思い～	
参拾捌巻～運命～	
参拾玖巻～別れ～	

140 137 135 132 130 128 124 121 118 115 112 110 107 102 99 96 92 88

序章／終わりと始まり／

「なんでこんな事になっちゃったんだろ……」

そう呟いた白神 栄（しらかみ ひいらぎ）は、あろうことか狼と対峙していた。

——遡ること五分前——

学校が終わり、帰り道を歩いていたら、狼がいきなり目の前に出てきたのであった。

「どうしよう……助けを呼ばうにも山道だから人はいないだろうし、なぜか携帯の電波も届いてないし……」

普通なら絶対に起こらないようなことが、次々と起こっていた。狼がこちらに近づくたび、こちらも少しづつ下がっていく。そんな状態が続いていた。

しかし、その状態は長くは続かなかつた。ふいに、自分の背中が何かに当たつた。驚いて後ろを振り返ると、いつもはそこにあるはずのない壁があつた。

「え!? なんでこんな所に壁があるの!?

いきなりのことに頭が混乱してしまう。しかし、狼はそんな事お構いなしにこちらに寄つてくる。

「やばい！ どうしよう！ 何か武器になる物は!?

あたりを探してみるが武器になりそうなものなんて見つからない。他に方法を考えるが、全く思いつかない。

栄の脳内には次第に、「死」という言葉が浮かび上がつてきていた。「なんで……なんで私がこんな目にあわなくちゃいけないの……」

迫る死に対する恐怖のせいか、目からは涙が流れていた。

助かる方法もない絶体絶命のこの状況で、栄は生きる術と希望を失い、諦めてしまつていた。

栄は俯いて泣いていたが、もう何をしても無駄だと思つて覚悟を決め、狼の方を向く。

狼は、向くのを待つていたのか、向いた瞬間に飛びかかつて來た。

栄は静かに目を閉じた……。

狼が飛びかかってきてから、既に数十秒は経っているはずだが、一向に痛みはこない。

柊は恐る恐る目を開けてみる。先程とほぼ変わらない風景が視界に入ってきた。しかし、変わっているところもあつた。さつきの狼はおらず、後ろの壁がなくなつていていたことだつた。

先程までのことが嘘のように思える。そんな不思議な状況を目の当たりにしていた。

「さつきのつてなんだつたんだろう……幻覚にしては出来すぎてる気がするし……そもそも幻覚を見るほど疲れなんて溜まつてないし。逆に本物だつたら、後ろの壁や狼はいるはずだし……」

数分考えこむが、そう簡単に理解なんてできない。

柊は諦めたのか、

「考へても仕方ないし、日も暮れてきたから早く帰らなきや」と、言つて帰ろうとした。

しかし、そこで立ち上がる時、ふと腰のあたりに違和感を感じた。

「あれ……なんか腰に違和感が……何だろう」

そう言つて腰を見てみると、腰の下辺りから白いふさふさとした尻尾が生えていた。

「はえ？」

私の思考は完全に停止していた。

それもそのはず。腰を見たら尻尾が生えているなど、普通じやありえないどころか、絶対に起こらないことなのだから。

状況が飲み込めないまま時間が過ぎていく。

数分経つて、やつと思考が動き出したが、

「は!? え、なに!? なんなの!? なにこれ!？」

と、完全にパニック状態であつた。

…………

ようやく落ち着きを取り戻し、今の現状を整理し始める。

「えへっと、まず狼と対峙したんだよね。その時点でもうおかしい
んだけど……で、そこから、襲いかかられたと思つたけど狼はいなく
なつていた。それで、帰ろうとしたら尻尾が生えていた……というこ
とはこれつてもしかしてあの狼の尻尾つてことだよね……でもなん
で尻尾だけ……？」

さつきまで慌てていたのに、今では状況を冷静に判断していた自分が不思議に思えた。

考えがまとまり、これからどうしようか考えていると、不意に後ろから誰かに声をかけられた。

序章式～終わりと始まり～

呼び止められた私は恐る恐る振り向く。するとそこには、見知らぬ女性が立っていた。

「いきなり呼び止めてしまつてごめんなさいね。あなたに少し聞きたいことがあるって」

そう言うと、女性はこちらに歩いてきた。しかし、知らない人を近づけることには抵抗があるため、少し怯えながらも近づくのを止めるようになつた。

「……こつちに来ないで。あと……聞きたいことがあるなら、まずは私の質問くらい、こ、答えてもらつていいでしょ」

私がそう言うと、女性は少し考える素振りを見せてから、「ううん……それもそうね。で、何が聞きたいのかしら？」

と、交渉に応じてくれた。

まずは、相手のことを知ることが優先的なので、私は一呼吸おいてから、ごく普通の質問をぶつけてみる。

「貴方はだれなの？」

「私は八雲 紫。ちなみに、スキマ妖怪よ」

「妖怪……？」

いきなり妖怪だと言われて動搖してしまう。

私はもとより妖怪なんてものは信じていない。だが、先ほどの自分の尻尾を見た時から、信じずにはいられなかつた。

そんな中、動搖してる時につい、口が滑つてしまつた。私はその時に、なんでそんなことを言つてしまつたのか自分でもわからない。ただ、言つたかったのだ。

「で、その妖怪が私になんかようかい？」

……。

不意に口から出た言葉が、時間を止めたように感じた。言つた後に後悔と恥ずかしい気持ちがこみあげてくる。

（あ……ああああ！　言つてしまつたあ！　恥ずかしいつて！　恥ずかしそうるよ！）

自分で言うのも何だが、恐らく私の顔は今真っ赤であろう。

(言つてしまつたから変な状況になつてる！ この状況どうしよう！
自分でまいた種とはいえ、これはひどすぎるつて！)

……数秒が何分かに思えるほどの長い沈黙が続く。

(ああ……！ これは怒らせちゃつたよ！ 馬鹿にされたと思つて絶対怒つてるつて……)

そう思つた次の瞬間。

「あつはははは！ うふふ……ふふ！」

(え？)

「ふふつ……！ な、なかなか面白いことを言うじゃない……！ 妖怪と、ようかいを掛け合わせるなんて……！」

意外な展開に空いた口が塞がらない。まさか笑うなんて思つてもなかつた。

——八雲 紫が笑うこと数分——

「ふく……なかなか面白かつたわ。で、質問はもういいかしら？」

(あんなので数分も笑い続けられるもんの……)

しようもない疑問が残るが、そんなことを考えてる暇はないので、話を続ける。

「……はい、ありません」

「じゃあ、今度はこっちが聞く番ね」

八雲 紫はそう言うと一呼吸おいてから、

「あなたこら辺で狼を見なかつた？」

と、聞いてきた。

柊は、場の空気が重くなつたのを感じた。

「狼……ですか……え、ええ、見ましたよ。でも、目を閉じたらしくなつていて」

「そう……目を開けたらくなつてて、今の現状と……ならあれしか考えられないわね」

「え？ あれつて何ですか？」

「恐らくその狼、あなたに憑いてるわ」

「え？ どういうことですか？ 憐いてるつて……」

「あなたと対峙したその狼は幽霊だつたの。こう言つてしまふのは申し訳ないけど、もう死んでるつてことね。でも、何か未練が残つていたのかしら。靈の状態でうろついていたから、保護したのだけれど、逃げてしまつたの」

「そなだつたんですか……」

「それで逃げている途中にあなたにあつて、多分あなたに取り憑いたのだと思うわ」

「そんな状況だつたんですか……でも、なんで私にとり憑いたんでしょう……」

「ごめんなさいね。それは私にも分からぬわ」

「そうですか……」

「まあ、とり憑いたつて言える根拠はあなたに付いている耳と尻尾ね」

「え？ 耳と尻尾ですか？」

尻尾はわかつてゐるが、耳と言われたため、自分の手を耳にやつて見る。

（耳つて言われてもそんな変わつてゐはずなんて……）

しかし、もとあつた耳の場所に耳はなく、頭には違和感があつた。頭に手をあててみると、そこには、ピコピコと動く耳があつた。

「ええ？ なんでこんなところに耳が生えてるの!?」

「あら、気づいてなかつたの？」

「はい……」

「あなた本当に面白いわね」

紫にクスクスと笑われてしまう。

「そうですか……で、私つてとりつかれてるんですよね？ それつて大丈夫なんですか？」

「どういう意味かしら？」

「その、体が乗つ取られて勝手に動くとかつて……」

「ああ、そういうことなら心配はいらないわ。その狼は悪いことしないみたいだし、残念だけど、もう長くはないみたいね……そうね、考えられる理由としてはもう長くはないから、最低でも魂を残すためにとり憑いたのかもしれないわね……」

「そうなんですか……」

「それはそれでいいけど、あなたこれからどうするの？ 普通の生活には戻れないでしよう？」

「あっ……」

「言われてみれば確かにそうだ。こんな、耳と尻尾がついている状態で普通の生活に戻つたら、どうなるかわかつたもんじやない。」

「そうね……困つてゐるなら……あなた面白いし、もしよかつたら幻想郷に来ない？」

「幻想郷……？」

「そうよ、あなたのような妖怪たちがいる世界よ」

「え……私つていつ妖怪になつたんですか？」

「狼が消えたときからよ。憑かれたとは言つたけど、その狼の全てがあなたの中にあるわけだから、あなたは狼と同化したのと一緒よ。だから妖怪になつたも同然なの」

「そ、うなんですか……」

人間ではない。

そう遠回しに言われた発言には、恐ろしいほど威圧感があつた。
……もう人間として生きていくことができない。

「その幻想郷つてところには、私と同じような種族とかいるんですか
……？」

「そうね、あなたは恐らく白狼天狗だから、山にいると思うわ」「わかりました」

人間として生きていけない。妖怪になつてしまつたのなら、妖怪として生きていく。それが今ある私の道ならば、進むしかない。
もう後戻りはできないのだから……。

「お願ひします。私を幻想郷に連れて行つて下さい」

覚悟は決まつた。私はここから新しい道を進む。

「そう、分かつたわ。じゃあ、あなたの準備が出来たら迎えにいくわ
ね」

「分かりました」

そう言つて八雲 紫と分かれだ。

私は早くに、両親をなくしていた。だから、私の家にはおばあちゃんしかいないため、「大学だから、一人暮らし始める」と言つておいくだけて大丈夫だろう。

「もういいかしら？」

「はい。もう何もありません」

必要最低限のものを持つてそう言つた。

「じゃあ、行くわよ」

そういつて八雲紫が手を出すと、そこに空間の裂け目のようなものが現れた。

「ここを通つて行くわ。さあ、入つて」

私は深呼吸をしてから、その空間の中に足を踏み入れた。

壱巻／妖怪の山と天狗／

空間に入つてからは紫の後を歩いていた。

「さあ、つくわよ。まずはあなたの仲間となる天狗達のいる所に送るわね」

そういうと、紫は空間を開いた。

「さあ、ここよ」

私は空間から出る。出ですぐに私の目に入ってきたのは、『天狗総会場』と書かれている立て札と建物だった。

「この建物は簡単に言えば、天狗達が集まる場所よ。ここに大天狗つていうのがいるはずだから挨拶して来なさい。私からも話はしていくから。中に入れば天狗達がいるはずだから、聞けばわかると思うわ」

紫は丁寧に説明をしてくれた。

「ここまでしていただきて、本当にありがとうございました」

「いいのよ別に。私は当然のことをしたまでだから」

私がお礼を言うと、紫は空間の中にきえていった。私は建物の方に体を向ける。

「ここが天狗達のいるところ……今の私みたいな姿の妖怪がいるんだよね……」

緊張するが、何とか気持ちを乱さないようにする。

「ふう……よし」

大きく深呼吸をしてから扉を開ける。しかし、中に入った途端に中にいた天狗達の視線が一斉にこっちを向いたため、思わずたじろいでしまう。

「あ、ああ、あの……」

一人一人の視線に圧倒されてしまい、声が小さくなってしまう。そんな中、動搖している私に一人の天狗私を睨みながら近づいてきた。そして私の目の前まで来ると言うつた。

「動かずに質問に答えろ。まず一つ目、お前見かけない顔だが、何者だ」

「え、えっと……その……」

いきなりの展開に私の思考はついていけず、さらに、周りの天狗に圧倒されて返答が出来ずに口ごもってしまう。

「なんだ？ 簡単なことだろう？ なぜ黙っている？」

その時の私の口はまるで何かの器具で固定されているかのように動かなかつた。

「そうか……答える気は無いようだな。ならば貴様は、我々天狗に化けた敵として認識し、今ここで排除する！」

(え？ は、排除！)

排除という言葉にさらに頭を混乱させてしまい、完全にパニック状態に陥つてしまふ。

「天狗の領域に入つた事を後悔して死ぬがよい！」

この瞬間私は死を悟つた。

(あ……今度こそ私は死んじゃうんだ)

何もできないまま、死期が目の前まで迫つたその時。

「待てい！」

大きい声が総会場に響いた。全員が声のした方を向く。するとそこには、他の天狗とは少し違う雰囲気を纏つた天狗がいた。

「「だ、大天狗様！」」

天狗達はそう言うと、全員頭を下げた。

ここに来て初めて誰か來たことに気づいた私は、目だけをそちらの方に向けた。

(あの人人が紫の言つてた、大天狗……)

どんな姿をしているのか確認したかったが、先ほどの混乱で首が動かず見えなかつた。

「いやはや、危ない所じやつたのう。紫殿にはもつと早く言つてもらいたいものじや」

大天狗はそう言つて、こちらに歩いてきた。

「お主が紫殿の言つていた白神 梓じやな？」

「は、はいつ！ そ、そうです！」

私は何とか、固まつた体を無理やり動かして、大天狗の方に向く。

その時に分かつたのだが、とにかく高い。私の身長よりもはるかに大きく、その大きさはまさにそびえ立つ山のようだつた。

「先程はすまなかつたの。わしらから謝つておこう。すまなかつた」「い、いえ、そんな……謝つていただかなくとも大丈夫ですのでもしろお礼を言わなければいけないのは私のほうです。こちらこそ助けて頂き、ありがとうございます」

言葉をいくつかかわした後、大天狗はここにいる天狗達に、「皆の者、よく聞け！ 先ほど紫殿から言われたのだが、こやつはわしらの仲間じや！ 敵なんかじやないからのう、安心せい。だからこれから、仲良くしてやつてくれ！」と言つた。

「これでわしらの仲間じや。歓迎するぞ」

大天狗が言い終わると、総会場に拍手が起こつた。その拍手が起くる中、一人こつちに歩いてくる人がいた。

「先程はすまなかつた。初めて見る奴には警戒心が強くてな」

先ほどの天狗だつた。

「いえ……私も答えられなくて勘違いさせてしまつたので……」

「そうか……そんなことも知らずに話を進めてしまつて本当にすまなかつた。もしよければ、これからも会うことがあるだろうから、その時はよろしく頼む」

その天狗はそう言うと歩いて行つた。

（いい人なんだな……）

先ほどの天狗の後ろ姿を見て、そんなことを思つていると、周りが拍手しながら、話しているのが聞こえた。

「天狗の新入りつて久しぶりだよな」

「天狗自体あれだけど、女の天狗も結構久しぶりだよな」

「よく見るとかわいくね？」

完全に私に関する会話が聞こえてくる。

（うわあ……凄い目立つてる……）

人間の時から目立つことは苦手だつたため、こういう人が多いところも苦手だったのだ。

私の顔に嫌さがよつぱりでていたのか、大天狗が「終、ついて来な

さい」と、言つてくれた。

「は、はい」と、また助けられたなあと思いながら大天狗の後ろをついていく。

大天狗の後についていくと、ある部屋に連れてこられた。

「ついたぞ。ここがわしの部屋なんじやが、お主に話すことがあるから連れてきたんじや。取り敢えず、話は中でするから入つてくれるか？」

別に拒む理由もないとため、中に入る。

「そこ」に座りなさい」

私は控えながら座つた。

「さて……今日から君は天狗になつたわけだ。だから、天狗としてのルール、仕事など、覚えてもらう。よいな？」

「はい」

大天狗から、まず私が何の天狗で、どのくらいのものなのかなを聞き、そしてその後に、天狗としてのルール、役割など、数多くの説明を聞いた。聞いていると、改めて天狗になつた実感を感じた。

——説明聞くこと三十分——

「よし、これぐらいじやな。分かつたか？」

「はい。わかりました」

「そうか、ならよい。後は……おぬしの家じやな。こつちに來たばかりじやし、家を持つていなるのは当然か……」

「そうですね……持つていません」

「そうか……ならば、誰かの家に一緒に住んでもらうことになるが、それで大丈夫かの？」

「はい。大丈夫です」

「よし、じゃあ、戻るか」

そして私はまた、大天狗の後についていき、あの広間へと戻つていった。

式巻く新たな出会い

総会場についてからは、大天狗様が話をしていた。私が仲間になつたことや、これからどこの班に入るのかなど……。他にも数多くのことを天狗達に話している。

「…………というわけじゃ。…………そしてここからが本題なんじやが…………あ＼…………柊はこちらに来てまだ間もない。だから家がないのじやが…………誰か泊めてくれるものはいなかの」

主に私の本題である家のことを大天狗様が聞いた瞬間、「「はいっ！」」と、大勢の天狗が手を挙げた。そして間もなく、

「俺が泊めてあげるんだ！」

「お前引つ込んでろよ！　お前みたいな不潔な奴に柊さんを渡してたまるか！　俺が泊めるんだ！」

「柊だつけ？　うちに来いよ！　広くていいぞ！」

などの言い争いになり、終いには喧嘩が始まった。

そんな中、鈍感な私は、（泊めてくれる人達はいっぽいよかつたけど…………ええく…………なんでそんなに争ってるの……）と、思っていた。だんだんと、総会場が騒がしくなり始め、相手を押し倒してまで自分の家にさせようとするものもでてきた。総会場はさらに騒がしくなっていく。ついに、これに見兼ねた大天狗様が喧嘩を止めようとしたその時。

「いいかげんにしてください！」

大きな声が響き、その場が一瞬にして静まり返った。

「全く…………恥ずかしくないんですか？」

その人物はそう言うとこちらに来た。

「大天狗様、もしよろしければ私に柊さんを任せて貰えますか？」

誰も止めないため、自分が止めようとしていた喧嘩を先に誰かに止められて驚いていた大天狗様はようやく動き出し、その人物に言う。

「お、おお…………う…………うむ…………ひ、柊、それでよいか？」

相変わらず、場の空気を読めない鈍感な私は、「はい。大丈夫です」と言つた。

「み、みなもよいか？」

大天狗様が聞くと、全員無言でとまどいながらもゆっくり頷き始めた。

「あなた達に任せると、この子がどうなるかわかりませんからね……」「そうじやな……泊めてもらうなら同性の方が住みやすいじゃろうしちゃあ、柊は樺についていきなさい」

そう言われて最初は誰のことが分からなかつたが、流れでさつきの人だということが分かつたためその人の所へ向う。

初対面で挨拶は大切なので、挨拶をする。

「あ、あのっ……し、しらきやみ……白神 柊です！ よ、よろしくお願ひします！」

緊張のあまりに噛んでしまつた。

「ふふっ……柊さんですね。私は犬走 樺といいます。こちらこそ、よろしくお願ひしますね」

あまりに礼儀正しく、笑つた顔も美しいかつ、可愛くて、つい見惚れてしまうほどだつた。

「では、今から私の家に案内するのでついてきてください」

そう言うと、樺さんはにつこりと笑つた。その笑つた顔を二度見た私は、他のことを忘れるほど見とれてしまい、動きが止まつっていた。「どうかしましたか？」

「…………あっ！ い、いえ！ な、なな、何でもないです！」

「そうですか、では行きますよ」

そうして私達は総会場を後にした。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

総会場を出てから八分ほど経つた頃だろうか。

「あ……あの……も、樺さん……」

「は……はい……？ な、なんですか？」

「なんででしようか……すごい体が火照つてるんですけど、いつもこんな感じなんですか……？」

「い、いつもはこんなでは……ないはずなのですが……」

不思議なことに、二人とも体温が上がっていた。

——遡ること三分前——

柊がまだ飛べないため、総会場から歩いて移動していた。しかし不思議な事に、歩いているにもかかわらず、自分達の体温が上がり出し、体力が奪われている。そんな現象が起きていた。

「な……なんでこんなに、暑いんですかね……」

樺さんからの返答がない。

「あ……あの……樺さん……？」

もう一度読んでみるが、返答がない。おかしいと思った私は前を向いてみるが、前を歩いていたはずの樺さんの姿がなかつた。

「あ……あれ……ど、こに行かれたんだろう……」

樺さんがいないと先に進めないため、取り敢えずそこにあつた切り株に座つて待つことにした。

(体温高いし、なぜかドキドキする……なんでだろう……)

そう思つた瞬間、突然後ろから誰かに抱きつかれた。反射的に後ろを見るが、後ろを見た時、目に入ってきた人物に驚きを隠せなかつた。「も……樺さん!」

急激な展開についていけない。先ほど消えたと思っていた樺さんが今では後ろにいて、しかも私に抱きついているのだから。
(え!? な、なんで抱きつかれてるの!?)

とにかく、なんでこの状況になつているのか聞いてみる。

「樺さん! ど、どうしたんですね、ふあ!」

急に力が抜けていく。樺さんに耳を甘噛みされたからであつた。しかもこの甘噛みが絶妙に気持ちがよく、抵抗しようにも抵抗できな
い。

「も、もみじさ……んつ……や、やめてくらさい……」

私の声が聴こえないのか、樺は容赦なく攻めてくる。
(わ、私どうなつちゃうんだろ……)

参巻く幻と現く

あれからどのくらい時間が経ったのか分からない。体感的には、一時間くらいに感じる……。その間、ずっと樺さんに攻められていた。耳と尻尾を重点的に攻められ、まともに話せない程になっていた。

「ふわあ……も、もう……や、やめ……ひやい!?」

先ほどからずつとこんな感じである。

——十分後——

まだ攻め続けられている。

「ほ、ほんとに……もう……や、やめてくらさい……」

そう言つた時、先ほどまで、言つても止めてくれなかつた樺さんの動きが急に止まつた。

(あれ……やめてくださいのかな……?)

そう思つたのも束の間、今度はどこに隠し持つていたのか刃物を突きつけられた。

(ええ?! なんで!?)

私の頭は完全に落ち着きを失つてゐる。ほほ本能で、素早く樺さんの方に向いてみると、樺さんの目は、完全に殺る気の目だつた。やばいと思いつつも、こういう時こそ冷静になつて聞いてみる。

「も、樺さん? ど、どうしたんですか……?」

聞いてみたが、樺は黙つてゐる。不思議に思い、近づいた。

「え……?」

しかしその時、樺さんがいきなり刃物を刺してきたのだ。

「あ……あ、き……きやあああ!!」

そこで私はふつと、目が覚めた。額に手を当ててみると、汗をかいていた。

「はあ……はあ……はあ……あ、あれ……?」

起き上がりつて周りを見渡してみるが、そこは見知らぬ場所だつた。

そもそも見知らぬ場所と言つても、総会場以外知らないのだが。

「今のつて……夢……だよね?」

まさかあんな夢を見てしまうとは、それこそ夢にも思つてなかつ

た。

「とりあえずは、夢だという事でよかつた……」

ほつと胸を撫で下ろす。

先ほどのことが夢だつたということは解決したが、もう一つ気になつてゐる事があつた。

「……つてど、……？」

考えてみても、当然見当もつかない。記憶も遡つてみると、「うん……何も思い出せない」の一択で、答えは出てこなかつた。

唯一思い出せるのは、あの夢だけだつたが、なるべく思い出したくはなかつた。初めて会つた人に、あんな事を夢で見ていたなどと、口が裂けても絶対に言えない。自分の中でもそんなことを考えていると、聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「あ、起きましたか？ 気分はどうですか？」

そこには、今一番頼りたく、夢を見た後には会いづらい人がいた。

「榊さん」

そこには、榊がいた。

「いきなり倒れたので、慌てましたよ」

「え？ 倒れたんですか？」

「はい、いきなり後ろで……覚えていないのですね。まあ、仕方ないと思いますよ。妖怪になつて間もないようですし。それに、今日はいつもより比較的暑かつたですから。暑さにやられて倒れても、仕方ないですよ」

これからお世話になる人に、もう迷惑かけてしまつたとは……と、自分でも情けなく思えてくる。とにかく、迷惑をかけてしまつたことは謝らなければいけないと想い、謝る。

「あ、あの……迷惑かけてしまつてごめんなさい……」

「いえ、大丈夫ですよ。それよりも私は、榊さんがうなされていた方が心配ですよ。大丈夫でしたか？ 恐ろしい夢でも見てしまつたんですか？」

榊さんがとても心配そうに覗きこんでくる。

「は……はい。だ、大丈夫です……！」

夢のことも言えないが、今の権さんがとても可愛いことも、恥ずかしくて言えない。

「そうですか……でも、無理はなさらずに」

「あつ……はい！　ありがとうございます」

私がそう言つた後、権さんは何かを思い出したような仕草をすると、私にそれを伝えてくれた。

「あ、あとですね。大天狗様から聞いていたと思いますが、天狗には哨戒任務があります。ですから、体調が良くなつたら、私が哨戒任務に必要なことをあなたに教えますが、よろしいですね？」

「はい。分かりました」

（権さんと任務か……なんかワクワクするな）

任務と聞いた時に、こんなことを思つていた私は、この後、まさかあんなことになるとは夢にも思つていなかつたのである……

肆巻／災厄の予兆／

充分休んだからか、翌日の朝には、すっかり良くなっていた。

「あの……ほんとすみませんでした」

「いえ、いいんですよ。では、訓練を始めていきますが、始める前にこれを見てください」

そう言われて、包みを受け取った。

「これは……？」

「それはあなたが今後着て行く服です。おおかた任務で使うと思いますよ。それに、その服装だと動きにくいでしようし」

そういえばそうだつた。私は今の今まで、幻想郷に来る前の服で過ごしていた。言われるまで気が付かなかつたが、今思うととても動きにくい。

この服を用意してくれた権さんに、「ありがとうございます！」と、お礼を言つて、包みの中の服を取り出し、着替える。

——着替え中——

「どうですか？」

「はい！ 動きやすくて、とてもいいです！」

「それはよかつたです。では、訓練を始めましょうか」

「は……」

私が返事を返すのと同時に、山のほうで大きな音がした。

「な、なに！」

いきなりのことに慣れていない私が、焦りながらあたりを見回している時、権さんはすぐに、目を凝らすようにして音がした方を見た。「まずい……！」

権さんの表情には焦りの色が見えた。

「柊さんはここにいてください！」

権さんはそう言うと、剣と盾を持つて音のした方へ向かつていつた。

「あつ！ も、権さん！」

私が呼びかけた時には、既に飛び立つた後だつた。私は言われた通

り、待つ事にした。

家の外にいる者の気配にも気付かずに……。

一方榊は、音のした所へと向かつて行った。

榊はある一瞬で、その時にやるべき事をしつかりと判断し、自分の能力で音のした地点を見ていたのであつた。そのため、爆発した地点に真っ直ぐ向かう事が出来た。

「確かにこら辺だつたはず……」

榊が着いた時には既に、数名の天狗がいた。そばにいる仲間に何が起こつたのか聞いてみる。

「何が起こつたんですか？」

「いや、それがな……分からねえんだ……」

「分からんことは？」

「爆発したってのは確かなのに、全くないんだよ

「無い……何がですか？」

「痕跡だよ。爆発の痕跡が全くないんだ」

「痕跡がないですって？ そんな事つて……」

「そうだ、普通だと絶対ありえない事なんだ。爆発はたしかに起こつた。それは山の中に入る妖怪達が、ほぼ全員見てるだろうよ。でも来てみたら痕跡なんてない。こんな状況だから何も分からねえんだ……」

「そうですか……分かりました。ありがとうございます」

仲間と離れた後、榊は考えた。

（爆発が起こつたのに痕跡が無い……でも、爆発したところは能力で見たからそれは確かな事実……）

いろんな仮定を考えてみるが、どれも答えにはたどり着かない。

「ううん……」

・・・

榊さんが出て行つてから、早くも一時間が経とうとしていた。

「大丈夫だよね……榊さん……」

待つてゐる間、ずっと榊さんの事を心配してゐた。しかし、心配す

る中、いきなり扉を叩く音がしてきた。

「えつ……？」

聞き間違いかと思いつつ、耳を傾ける。すると、叩いている音がはつきりと聞こえてきた。誰かが外から扉を叩いている……。

(こんな時間に誰が……?)

不思議に思つたが、次第に扉を叩く音が大きくなつていく。
私の中の恐怖が膨れ上がり、足も震えだしていた。

(ここにいや……ダメだ!)

私は裏口に走りだしていた。その時、扉が勢いよく開いた。

扉を叩いていたものが入つて来て、中を見渡す。そいつは、裏口を開いていることに気が付き、裏口から出て、私の事を追い始めた。
裏口から逃げるときに見えたもの、それは、この世のものとは思えない、黒いドロドロとした塊のようなものだった。

「はあ……はあ……なんなの! あれは!?

見た途端寒気吐き気が止まらなかつた。あんなものは見たことがない。

私は後ろを振り返らず、後ろから迫る恐怖に、泣きながら必死に逃げていた。

この時はまだ、これが異変だという事に誰も気が付いていなかつた
……。

伍巻（信じるべき）事（

権は考えながら、森の中を歩いていた。

「やつぱり分からぬ……あの短時間で痕跡を消せるはずもないし……」

しかし、どうやつても、先ほどから同じ答えしか出てこない。

「なにか手掛かりがあれば……」

そう言葉にしたからか、権の後ろで木の枝を踏んだ音がした。唐突な、後ろからの音に動搖しつつも、その方向に意識を向ける。さつきまで、考えていて分からなかつたが、後ろをつけられていたらしい。（常に周りに気を配つていなきやなのに……私としたことが……）

「そこにいるのはわかっています。出てきなさい」

権が声をかけると、木の影から妖怪が出てきた。

「悪い悪い。別に驚かせる様子はなかつたんだがな」「邪魔をしないでもらえますかね。私は今忙しいんです」

そういつて剣を構えた。しかし、

「いや、別に邪魔しにきたわけじやないんだ。俺はただ、お前さんの連れが大変な目にあつてる事を伝えに来ただけなんだよ」

「……柊さんの事ですか？」

「ああ、多分そいつだ。さつき変な奴に追いかけられていたなあ……」

天狗を今まで何度も厄介事に巻き込んで来たのが下級妖怪だが、この妖怪の言つてることはどうも嘘だと信じがたいようだ。

（下級妖怪のいう事だから、嘘かもしれない……だから無闇に信頼してはいけない……でも、もし本当の話だったら、柊さんが大変な目にあつてゐる……）

確かにこの話が本当だつた場合、柊が大変な目にあつてることになる。だが、権には一つ引っかかることがあつた。

（なぜ、この下級妖怪が教えてくれるのか……）

「なんでそんな事を貴方が教えてくれるのですか……？」

権は警戒しながらも、思つたことをそのまま口に出して聞いてみた。

「……なんで、か……ただの気まぐれさ……」

「そうですか……でも、一応お礼は言つておきます。今、能力で確認しましたが、本当の事でしたね。ありがとうございました」

そういうと、権は飛び立つていった。

「理由……か……俺は……前にあんたに助けられたことがあるからな……その借りを返したまでき。……というよか、集中しすぎるのがお前さんの悪い癖だな。危うく、後ろにいた奴にやられそุดつたぞ……まあ、倒しておいてよかつたよ。やられちまつたら、借りを返すこともできねえ。全く……危なつかしいやつだよ。……また会う機会があつたらまた会おうぜ……」

そいつは、飛び去つた権に告げて、山の中に消えていった。

・・・

権は、急いで柊の所に向かつていた。

「いた！　あそこだ！」

一気に急降下する。

「柊さん！　伏せてください！」

その声に私は反応する。

「権さん！」

私は伏せながら言つた。権さんが敵を斬り倒す。

「大丈夫でしたか？」

「は、はいっ！　なんとか……権さんも無事でよかつたです」

「よかつたです……柊さん、どうして家から出たんですか？」

「いや、それが……」

私は説明し始めた。

——説明中——

「成る程……では、さつきの奴が家の中に入つてきたのですね」

「はい……もう、怖くて……逃げる事しかできずに……」

「いいんですよ。無事ならいいんです」

「そういえば、権さん。なんで、私が大変だと分かつたんですか？」

「先ほど下級妖怪が、柊さんが大変な目にあつてるというのを聞いたんです」

「そうでしたか。その妖怪さんにも感謝しなければですね。とにかく、助けてくださつて本当にありがとうございます」

「いえ、無事でなによりです。では、一度家に戻りましょう。どうなつてるのかも、かねて」

「はい」

そう言つて、私と榎さんは家へと続く道を進んでいった。

陸巻く無力の闇く

「くつ……なんでこんなに敵が多いの!?」

家へ向う道には多くの妖怪がいた。

「あまりに数が多くすぎる……早く大天狗様に報告しなければいけないのに……」

先ほど、怪我を負つてしまつた柊をかばいながら、次から次へと来る敵を切り倒す。そんな苦しい状況下に、柾はおかれていった。どう考へても、一対多数という、不利な状況だ。一人で自分と柊を守らなければいけないため、流石の柾でも体力が底をつき始めていた。

「はあ……はあ……まずい、増援を呼ばないと……流石に、辛い……」

そう言つた時だった。

「きやああああ！」

後ろから悲鳴が聞こえた。別の妖怪が柊を狙つたのである。

「柊さん！」

柾は急いで柊の所に向かう。

「柊さん！」

「いつ……あああ……」

柾が着いた時には、柊の腹部に、剣のようなものが深く突き刺さつており、血が大量に流れ出ていた。敵は、それを薙ぎ払うようにして、柊の腹部から抜いた。その時に、柊の腹部からは、さらに血が吹き出すように出て、内臓が見えるほどまでに、傷が開いた。

「うひやひやひや！ 天狗の血も、程よい赤みでいい色をしているなあ！ もつとだ……！」

敵の妖怪は、柊のそんな姿を見て笑つてゐる。

その妖怪の全ての行動が、柾の逆鱗に触れた。

「き……さ、まあ!!」

柾の剣が、その妖怪を切り刻む。

「貴様なんて殺してやる！ この世から消え去つてしまえ！」

柾の目は、憎しみと殺意のこもつた目をしていた。

その妖怪が完全に消滅した後、柾は柊に、今の段階で最も最善な応

急処置を始めた。しかし、応急処置をしてる間にも敵はどんどん迫つてくる。

「あともう少し……！」

応急処置がもうすぐ終わりそうな時、柊が一瞬だけ動いた。

柾はそのことに気がつく。

「柊さん！　もう少し……！　もう少しだけ耐えて下さい！」

この時柾は、柊のことで頭がいっぱい、周りが見えていなかつた。しかし、柊の目には、曇気ながらも、柾のすぐ後ろにまで来ている敵の姿が見えていた。

柊は、掠れた声で柾に言う。

「も……じ……さ、ん……にげ……」

「柊さん!?　どうしたんですか!?」

そこまで言つた柾は、ようやく後ろにいる敵に気づいた。しかし、もうかわせるほどの時間はなかつた。

「あ……」

柾が絶望を感じた時、ふいに横から押された。

飛ばされながらも、押された方を見ると、柊さんがこちら側に倒れてきているのが見えた。

「ひい……ら、ぎ……さん……？」

そう言いながら見えてしまつた目の前の出来事に、柾は受け入れられずにいた。

柊さんが、倒れて地面に着いた瞬間、柊さんの背中に、思い切り振り下ろされた棍棒が、直撃していた。骨の碎けた音が、頭の中に響いてくる。

自分のせいで、柊さんがこんな目にあつてゐる。自分が悪いことは分かつてゐるが、そう考えただけで、自分が押しつぶされそうになる。でも、今はそんなこと言つてる場合ではない。柾は、今は柊さんを助けたい、その一心で、柊をこの場から連れて、最速で総会場へと向かつた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

柾は、天狗総会場に着いたら、柊を医務室へ運び、治療してから、大

天狗様に報告した。

報告した後、権はどうしても、自分を責めずにはいられなかつた。
（なんで私は、柊さんを助けられなかつたの……！　柊さんは私を
庇つて、あんな事になつてしまつた……だつたら、私が……私が柊さ
んを庇つて攻撃を受けていれば……！　一人の仲間を助けられない
私なんて……こんなじや、柊さんに合わせる顔なんてないよ……）
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

権の報告後、すぐに天狗達が呼び集められたが、既に応戦してゐる天
狗もあり、集まつた天狗の数は少なかつた。

大天狗様が、集まつた天狗達に指示を出していく。

「二番部隊は一番部隊の援護じや！　哨戒班は……」

しかし、大天狗様の言つてることは、権の耳に全く入つていなかつ
た。

他の天狗が、全員指示場所に向かつた後、権は大天狗様に呼ばれた。
「権、お主が辛いのは分かる……じやがな、今ここでへこたれていても
何も変わりはせんのじや。今わしらに出来ることはわしらの領域を
守ること。領域を奪われて、お主が消えたら、柊も悲しむだろう。だ
からの、権……今は目の前の事だけに集中するんじや。わしから柊に
は言つておくから、今は柊が起きるまで、この領域を守つてくれ。よ
いか？　権、強くなると決めたのじやろう？　だつたら、今度は同じ
ような事が起きぬよう自分の仲間を守れるほどもつと強くなるの
じや」

「……はい」

その返事は小さいながらも、迷いのない真つ直ぐな返事であつた。

権は決意を固め、自分の指示場所へと向かつていった。

「おぬしなら絶対に……」

大天狗は、飛んで行く権を見てそう呟いた。

漆巻く能力の目覚めく

楓が飛んでいった後、大天狗は楓の様子を見に行つた。

「あやつなら、きっと乗り越えてくれるはずじゃ」

ふすまを開けて、治療室の中に入り、楓の状態を見ようとした。しかし、部屋を出る時まで、布団にいたはずの楓が消えていた。いや、正確にいうと楓の休んでいた布団も消えていた。

「な……どうつてる!? どうして楓が消えた……!?

さすがの事態に、大天狗も驚きを隠せない。

(な、なぜ楓だけでなく、布団も消えた……?)

そこまで考えて、はつと気づく。

「楓が消えただけなら、楓が連れ去られた可能性もあった。だが、持つていく必要のない布団まで消えたということは……いろいろと可能性はあるが、一番高いのは、楓の能力……か。しかし、なぜ今……?」最後に、どうでもいい疑問が出たが、今は余計なことを考えている暇はないので、忘れることにした。

「さて……これが能力だつたとすると、どんな能力が考えられる……?」

そんなことを言つて考えだすが、数十秒後、とんでもないことに気づいてしまう。

「待て……! もし、楓の能力が瞬間移動だとしたら……それはまずい! どこに居るかも分からぬ! しかも、今こんな状態の森に移動したとなると、下手をすれば死ぬかもしけん!」

大天狗は焦り始める。

「とりあえず、山全体を回るか……? だが、それだと効率が悪すぎる……」

固まつても仕方ないため、何か手がかりがないか、楓のいた場所に行く。しかし、向かった矢先、大天狗の足に何かぶつかつた。

「つ! ……こんな場所に物なんておいてあつたか……?」

言いながら下を見ると、そこには、また驚くものがあつた。

「ひ、楓!」

ついさっきまで消えたと思っていた柊がいたのであつた。

(今、また瞬間移動したというのは、都合がよすぎる。もしやこれは……透明化できる能力……？)

・・

櫂は合流した仲間たちと戦っていた。

「おい犬走！ 次の標的はどこだ！」

「十時の方角で、およそ四十メートルです！」

「分かつた！」

正確に敵の場所を特定して、仲間に伝える。

櫂が合流した後から格段に効率は上がり、そのエリアはものの数分で、そのエリアの敵を全滅にまで追い込んでいた。

「八時の方角！ 百メートルで、恐らくあれが最後です！」

「よし！」

仲間の一人が最後の敵を倒しに向かつたはずだった。

本当に一瞬の出来事だった。

倒しに向かつた仲間の首と胴体が、真っ二つに裂けたのだ。周囲に血や臓器が飛び散る。

「え……」

そこにいた天狗たちが静まり返り、呆然とする。

異臭で現実に引き戻されると同時に、恐怖がこみ上げてくる。先程までとは違う殺気を感じた。

ようやく一人が沈黙を破り、止まっていた時間が動き出した。

「くつ……クソ！ お前ら逃げろ！ 僕がこいつをひき止めている間に！」

そう言いながら突っ込んでいった。

「ま、待てって！ ここは一旦退こう！ いくらお前でも……それは無理だ……！」

と、仲間の一人が言つたが、

「こんな野放しにしておけないだろ！ それに……死んじまつた班員のためにも、こいつだけは絶対にやらなきやいけねえ……！ だか

ら、ここは俺一人に任せて早く逃げろ！」

「くつ……」

その天狗はとまどっていたが、

「おい！　はやくしろ！」

「わ、分かつた……」

渋々、承知するしかなかつた。

仕方なさそうに、全員の方を向く。

「時間を無駄には出来ない！　行くぞ！」

全員で、その場から離れた。

「生きて戻つてこいよ……」

捌巻く強者く

「……よし、逃げたな……」

そう小声で呟き、妖怪の方を向く。

「お前さんよお。よくも俺の班員を殺してくれたな……」

その声は低く、怒りがこもっていた。

「自分で何したかわかつてんだろうな？ こんな大勢引き連れて来たかと思えば、天狗に喧嘩売るような真似しやがつて……まあいい、お前には地獄で後悔してもらおうかね……班員を殺したことと、この鴉丸を相手にしたこと……」

鴉丸があれこれ言うが、敵はそんなことお構いなしに攻撃していく。

「へ？ ……って、うおあ！」

攻撃を咄嗟に避ける。避けた後、後ろにあつた木が切り倒された。

「あつぶねえ……てめえ！ いきなり何しやがる！」

しかし、相手は無反応だ。

（目の前の空間が歪んでいたからなんとか攻撃が分かつたが、この攻撃……鎌鼬か……なるほど。こいつはなかなか厄介な相手だな……さてと、どうするか）

考える隙を与えさせないと言わんばかりに、相手は鎌鼬を飛ばしてくる。

「チツ……さつきみたいにいちいち見て確認できない……これじゃあ、音に集中するために耳に全神経を研ぎ澄まさなきやなんねえ……クソッ！ 避けるのに精一杯だ！ ……このままだと、いつまでたつても攻められねえ！」

ともかく攻める手立てを考えなければいけない。

「とりあえず空中に一回退くしかねえ！」

森のなかから飛び出し、飛んでくる鎌鼬をよけつつ、空中へと逃げる。

「距離をとれば鎌鼬が来るまでに余裕をもつてかわせる。そしてなおかつこつちからは相手が見える……ここからじわじわと攻撃してい

くか

そうすると、手を前にかざし、

「そんじや、お手並み拝見といこうか……天符『牙旋風』！」

牙のような風が、敵めがけて飛んで行く。

「全部命中！ こんなのもかわせないのか。もしや倒せたか？」

砂埃がかかつていてよく見えない。

「まあ、むやみに動くよりは、待っていたほうが賢明だろう」

次第に煙が消えていく。しかしそこには、傷ひとつない敵が立っていた。

「な!? 無傷!? あれ全部喰らつといて無傷はねえだろ!」

敵がこちらめがけて鎌鼬を飛ばしてくる。

「さつきよりも速い!? ダメだ！ 避けられ——」

脇腹のあたりに、鎌鼬が命中する。

空中から地上へと落下していく鴉丸を敵は見ている。

「なあんてな。どこ見てんだ、お前」

「?」

敵は咄嗟に後ろを振り向くが、

「もう遅い」

敵は二つに斬れ、消滅した。

「お前が相手してたのは、全部俺の能力で作った残像。俺の残像は、仲間からも厄介だと思われるほどでね。残像でも攻撃できんだよ。上手かつたろう？ ……って聞いても意味ないか。……まあ、一つ言わせてもらえば、残像と戦ってるお前は滑稽だったよ」

そうその場に残して、仲間の後を追つた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

場所は戻つて天狗総会場。

私は、目を覚ましていた。傷はほぼ完治しているようで、体は動かせるようになつていた。

(やつぱり、治癒力が凄い……)

起きた私は大天狗様から、私が眠つてゐる間に起こつた出来事の話を聞いた。自分の能力が分かつたということ、そして、その能力がどう

ういうものなのかを聞いた。

玖巻く吉か凶かく

「私に能力……ですか……？」

自分自身に能力があるなんて初めて聞いたし、そんなものあつたのかと驚く。

「そうじや。わしがお主の様子を見に来た時、お主の体と布団が消えていたのじや」

「消えていた……といいますと？」

「そのままの意味じや。見えなくなつていたんじやよ」

「もしかして……それが私の能力の効果ですか？」

「恐らくな。だからわしは、お主の能力は、透明化の能力じやないかと考へていてる」

……開いた口が塞がらない。

（え、なに？ そんな能力私が使つていいの？ いやでも、デメリットとかは絶対あるだろうし……）

そんな葛藤を繰り返していると、

「しかし、透明化だと考へているが、まだ確証はない。そこでじや、今一度確認するためには能力を使つてほしいのじやができるか？」

と言われた。

私には、特に断る理由なんてないため、喜んで引き受けた。

「は、はい！ やつてみます！」

しかし、簡単に引き受けたものの、どうやつて能力を発動させるのか検討もつかない。

「あ……あの……大天狗様……」

「ん？ なんじや？」

「その……能力つてどうやつて発動させれば……」

「そうか、わからなかつたか、すまなかつたの。やり方……そうじやな……例えば、念じてみるのはどうじや？ うちの天狗には念写するのもおるからの」

「わかりました。やつてみます」

私は目を閉じて、消えろと念じてみる。

沈黙が続く。

おそらく、結論を言えば、

「何も起こりません……」

「そうか……じゃあまだコントロールできていないのか、もしくはやり方が違うのか……」

——考えること八分——

——（）で私は、一つの考えに辿り着く。

「私さつき念じた時になにも対象を決めてなかつたから、もしかしてできなかつた……？」

「ほう……それもあるかもしれないの……試す価値はあると思うが、やつてみるか？」

「はい、やつてみます」

私は再び目を閉じて念じてみる。

（布団よ消えろ布団よ消えろ布団よ消えろ……）

——数十秒後——

これぐらいでいいのだろうか、念じるのを止め、目を開けてみると、しかしそこは、さつきと一風変わらぬ風景があつた。

「できませんでした……」

「そうか、できないか……うむ……どうしたものか……」

「うん……どうすればいいんでしょうか……」

そう言いながら枕に手をつけたその時であつた。

「え……？」

手元にあつた枕が消えていた。

「柊！　お主どうやつて能力を使つたんじゃ！　枕が……枕がきえて

いるではないか！」

「え……えええええ！」

自分でもどうやつたのかわからない。

「え、ええつと……思い出して、さつき何をしたか……」

必死に、さつきやつたことを思い出そうとする。そして、私の中で歯車が、かみ合わさつたかのように全て合致した。一つの答えに辿り着く。

(さつき私は枕に触れた……ということは、触れたら透明にすることができる……?)

試しに、布団に触れてみる。すると、そこにあつた布団が消えてしまつた。

「やつぱりそうだ……触れたら透明になるんだ……大天狗様! 触れると能力が発動します!」

「そうじやつたか、だからあの時も……いやはや、発動条件がわかつてよかつた」

「ここで私が、あることに気が付く。

「でも、これって……」

「うむ? どうした?」

「なんでもかんでも触れると消えるって、すぐ不便じや……」

「いや、大半の妖怪はそうなんじやが、おそらくまだ能力を制御できていなだけじやろう」

「じゃあ、自在に操ることは可能なんですか?」

「そうじやな。練習すればすぐにでも制御できるようになるじやろ。しかしました、便利な能力じやな……」

(透明か……やつぱり便利なんだな。そんなに便利なら、もう足を引っ張らなくても大丈夫になるかな……)

私は、これまでにないくらい、能力を使いこなそう。そして、誰かのためになれるようになろうと決心していた。

「そうだ、この能力の解除の仕方が……」

「いや、解除はおそらく触れられるか、あるいは、柊の意思で解除できると思うぞ」

「そうなんですか。ありがとうございます」

「いや、いいんじや。柊の能力がどんなものかもわかつたことじやし」

そういうと、大天狗様は立ち上がりつて私に言つた。

「あとはお主の練習次第じやな。自分でその能力の欠点や、どこまで扱えるのかを知つておくことも大切じや」

「はいっ!!」

私は大きな声で返事をした。

拾巻く奇妙な出来事く

権のいる哨戒班では、作戦を練っていた。

「どうするか……」

「このまま無闇に攻めても無駄だしな……」

「だからと言つて、このままじつとしてんのかよ!?」

「動くのは構わないが、どう殲滅していくか……」

「そこが問題なんだよな。効率よくやつていかないと……へたすりや死ぬかもしねえからな……」

「ううん……」

——悩むこと十分——

ここまで悩み、一人の天狗が異様なことに気づく。

「おい、思つたんだが……権、ちよつといいか?」

「はい、なんでしよう?」

「ちよつと能力で周り見てくれねえか?」

「え? いいですけど……もしかして、何かあつたんですか?」

「いや、そういうことじやないんだがな……少し気になつてることがあつてな……」

「言えないなら言えいで大丈夫です。じゃあ見ますよ

権が能力を使う。

「権、敵がいるか?」

「いえ、周りに敵の影は見えません」

「そうか、ありがとう」

その天狗は権にお礼をいうと、立ち上がりつて他の天狗達のところに戻る。

「みんな」

「どうした?」

「薄々おかしいとは思つていたが、みんな思わないか?」

「なにがよ?」

別の天狗が言う。

「敵だよ……敵が全く来なくなつたじやないか。さつきまであんなに

いたのに」

そこで全員気づく。確かにここに来るまでの道、そして今ここにてこれを言われるまで気が付かなかつたが、敵を見ていなかつたのだ。

「……確かに不自然だな」

「普通にいてもおかしくないよな……でもいないつて……」

「俺達がここに来てから、十分以上たつてはがこここの周りに敵の気配もない……」

「あの数なら山全体を回るのに一時間もかかるないだろう」

「だから敵に見つかってないつてのがおかしい……ということか

……」

「いやでも、敵が応戦に向かつてはいるという可能性もあるんじやないか？ 俺達じやない他の班のところに」

「あつたとしても、その可能性は低いんじやないか……？」

「なんでだ？」

「何度も生き返る敵がいただろ。あれは他のやつが応戦に行かないようにするためにそうしたんだと思う。逆に言えば、相手はそれほど本氣らしいな」

「そうか……」

別の天狗が、また別の考えを出す。

「だつたら大走、能力を使って山ん中みてくれねえか？」

「すでに見ておいたよ」

先ほど柵にお願いをしていた天狗が言つた。

「因みに、このあたりには敵はいなかつたそうだ」

「はい、いませんでした」

「そうだつたか……じゃあ今度は、山の隅々まで見てくれないか？ どこのどれくらいいるのか確認したい」

「はい。わかりました」

柵は能力を再び使い、山の隅々を見る。

しかし

「え……そんな……なんで……？」

一人が柾の異様な反応に気がつく。

「どうしたんだ？」

「て、敵が……どこにもいません！」

「はあ!?」

そう、どこにも敵がないのである。先ほどまでいた敵全てが跡形もなく消えてしまっていたのである。

「な、なんでいないんだ……？」

天狗達が動搖が隠せないところに、

「おうい！ みんな無事か!？」

と、聞き覚えのある声がした。そこには、鴉丸がいた。

「鴉丸！」

鴉丸が降りてくる。

「お前無事だつたんだな！」

「あたりまえじやねえか！」

仲間たちと再開をした。

しばらくして一人が、

「鴉丸、ここにくる途中に敵は見たか？」

と聞く。

「……そういうえばやけに来るのが楽だつたな……」

「どうか」

別の天狗が言う。

「どこにもいないとなる、ほんと恐ろしいつすね……」

「そうだな……でも警戒はしておかないとな……」

そういういろいろと言つているところに、他の班の天狗が来た。

「なんだ、どうした」

「迅速に伝えると言われたことがあります。先ほど博麗の巫女が、異変を解決したとのことです」

「へ?」

全員すつとんきような声をだす。

「え……まじ？ 解決したの……？」

「はい、解決したようです。敵が急にいなくなつたでしょう？ その

時には終わつたようです

「そうか、だからか……」

「では、私は次のところへ向かわないと行けないので」

「おう、ご苦労だつた」

そう言うと、飛んで行つた。

「終わつたのか……」

「終わつたんだな……良かつたよ、全く……」

「どうせ招集がかかるだろうから、先に総会場に向かつてようか
みな、重い体を動かし、総会場へ向かつた。

拾壹巻／幻想郷の情報屋／

異変終了後、各班は大天狗に報告をする。権のいる班は、一番早く報告を終えた。そしてその後権は、柊に会いに行つた。

「柊さん……」

「権さん……」

沈黙の後、権さんが私に近づく。

「柊さん、ごめんなさい！ 私が、私が……！」

「そんなこと言わないでくださいよ！ 私だつて……無力で……！」

私と権さんは抱きながら、泣きあつた。

そして権さんは、任務の疲れと泣いた疲れで眠つてしまつた。

「権さん相当疲れてたんですね……」

私は大天狗様を探しに行つた。

「大天狗様」

「ん？ なんじや？」

「その……本当にありがとうございました。私の看病だつたり、能力のことだつたり……」

「いや、いいんじやよ。わしは仲間が無事ならそれでいいからの。ところで権はどうした？」

「私と泣いた後に眠つてしまつたようで……」

「そうか。権は頑張つておつたからのお……起きた時にお主がいないとまた権が慌てるかもしだれんぞ……？」 戻つてやつたほうがいいと思うぞ。今のあやつには、お主が必要じやからの」

「大天狗様……わかりました。では私は戻るので失礼します。本当にありがとうございました」

「うむ。一応、森にまだ下級妖怪がいるかもしれんから気をつけるんじやぞ」

「はい。失礼します」

私は、権さんのいる部屋に戻る。そして寝ている権さんを抱え、権さんの家に向かつた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

帰り道は何ごとも無く、無事に帰つてくることができた。

榊さんを布団の上に寝かせる。私にも、一応疲れはあつたため、すぐに寢ようとしたが、ふと榊さんのことが気になつてしまふ。

私は榊さんが寝ている布団に近づき、榊さんの顔を覗き込む。

(榊さんの寝顔かわいいなあ……すこい肌がつやつや……)

榊さんを見た後、私の体は不思議な行動にし始めた。なんと榊さんにキスしようとしたのだ。

なんでこんな事をしてしまつたのかは分からない。ただ、榊さんがかわい過ぎたため、体が勝手に動いてしまうのだつた。自分の唇を近づける。

が、

榊さんが寝返りをうつた。その瞬間に私は驚いて体を反らした。そこで自分が何していたのかを知る。

「な……なんで……私……そんなこと……！」

その場で固まる。

そして私は、顔を赤らめながら布団に向かつていた。

……………

——翌日——

「んつ……」

窓から日が差し込んでいる。

「ふわああ……」

一伸びして起き上がり、台所へ向かう。台所につくと、既に榊さんがいた。

「あつ、榊さんおはようございます」

「榊さんおはようございまふ」

眼鏡で口が回らなく、語尾がおかしくなつて赤面した。しかし榊さんは気づいてないようだつた。

「昨日はごめんなさい、榊さんに迷惑かけてしまつて……」

「いえ、そんな迷惑だなんて……」

ごく普通の会話を続ける。

そして、食事をしている時にある話になつた。

「そりいえば柊さん、能力がわかつたんですね！ 透明化の能力つて！」

柊には予想もしていなかつた言葉が飛んできておもわず慌ててしまい、むせてしまう。

「げほつ！ ごほつごほつ！ も、樺さん!? な、なんでそれを!?」「え、なんでつて言われても、新聞にのつてますよ？」

「し、新聞!? ちょっと見せてもらえますか!?」

樺さんから新聞を受け取る。

その新聞には、大きな見出しで、

『新入り白狼天狗の柊、ついに能力が発覚！』

と、大きな字で書かれていた。

「な、なんですかこれはああ!?」

そして素晴らしいことに、顔写真つきである。

「しかもなんで顔写真も!?」

「あれ、知らなかつたんですか」

「いやいやいや、知りませんよ！ てかこんなのがいつ撮られたんです

か!?

「やつぱり気付かなかつたんですね。まあ盗撮のプロですから仕方ないですね」

「仕方ないじやすみませんよ！ これプライバシーですよ！ プライバシー！」

私が必死にプライバシーと言つても樺さんはきよとんとしている。それもそうだろう、こつちにはまだそんな言葉はないのだから。

「ああ！ もう誰なんですか！ これ撮つたの！」

「誰つて、あの人しかいませんよ。私の上司にあたるあの……」

そう樺さんが話をつづけようとした時だつた。

「すみませくん！ 毎度おなじみ、文々。新聞です！ 白神 柊さん

大きな声が玄関からしてきた。

「噂をすればなんとやら……ですね
権はつぶやいた。

拾式巻く怒りのさなか

私は誰かわからないまま、柾と玄関に向かい、ドアを開ける。
ドアそこにいた人物に柾は話しかける。

「文さん、やっぱりいつも通りですね」

「なにせ新しい情報が売りですから」

「だつたら捏造じやなくて正しい情報を早く知らせてくださいよ。
まあ、今回は正しかったようですが」

「あやややや、嘘なんて書いた覚えはありませんけどねえ」

そう言つて鴉天狗はとぼけたように、笑いながら話す。

私には何もわからないまま話が進んでいく。

「あ、あの……」

鴉天狗が私にきづく。

「あなたが柊さんですか！ 取材してもいいですか？」

そこに柾さんが突つ込む。

「いやもう記事にしてるでしょう」

「あれは能力の事ですから。今回は柊さんについての記事ですよ」

鴉天狗は誇らしげに言う。

私が口を開く。

「いや、あの……誰ですか？」

「申し遅れました。私、『文々。新聞』を書いている射命丸 文という
ものです」

「文々。新聞……つて、あなたもしかして！」

「おや、ご存知でしたか」

「私のこと盗撮した人ですよね!?」

「盗撮なんて、そんな人聞きの悪いことしませんよ！」

「してるじゃないですか！ 思いつきり！ 私、撮つていいか聞かれ
てないのに、この新聞にのつてるじゃないですか！」

「いやあ……それはですね……」

「撮るならちゃんと……許可とつてくださいああい!!」

こうして私の怒りモードが始まつた。しかしこの時の私は、この

文さんが自分の上司になる方だということを知らなかつた。

「まつたくもう……」

「まあ、あれがあの人のやり方ですか……」

あの後文さんは、こんな状態では取材は無理だと判断したのか、帰つていつた。

私と樺さんは椅子に座る。

「そうだ、柊さん」

「なんですか？」

「そろそろ訓練を始めましょう。前回は仕方なかつたのですが……ある程度の力をつけていないと、敵と戦うことすらできずにやられてしまうでしよう」

「そうですね……」

「ですから、訓練をはじめませんか？」

「……実は私も同じことを考えてました。この前のことで私が、どれほど足手まといで、無力だったのかを……ですから、一段落着いたら樺さんにお願いしてみようと思つていたんです」

私は、一呼吸おき、自分の石を伝える。

「ですから樺さん、私に……から教えて下さい！」
頭を下げる。

「柊さん……」

樺さんはそんな私の肩に手をおいてこう言つた。

「あなたの覚悟、しつかりと受け取りました。これから頑張つていきましようね！」

「……はいッ！ ありがとうございます！」

「そして訓練なんですが、今日はもう夜もふけてますし、明日でもいいですか？」

「はい、私は大丈夫です」

「では、明日の訓練に備えて寝ましようか」

「はい。では、おやすみなさい」

「おやすみなさい、柊さん」

こうして、明日から私の訓練が始まるのであつた。

拾参巻(特別訓練)

「ん~！ いい朝ですね、柊さん！」

「はい！ そうですね！」

「では、特訓始めましょうか！」

「はい！」

二人は開けた場所に移動する。

「あれ、まだ柊さんに私何も教えてないですよね？」

「はい、何も教えてもらつてないです」

「わかりました。では、基本から行きましょう」

「はい！」

——説明省略——

「次に妖力の使い方、抑制の仕方です」

「は、はい！」

——説明省略——

「次は弾幕についてです」

「はい……」

——説明省略——

「では、スペルカードについて教えます」

「スペルカード……ですか？」

「はい、スペルカードとは非殺傷の弾幕です」

「なるほど、普通の弾幕とは違うんですね」

「そうです。まあ、あとで作り方とか教えますので、今は使い方だけ

で

「はい」

——説明省略——

「あとは……能力ですね。能力は自然に使えるぐらいにならなきやい
けません。そのためにはまず妖力が操れないといけません」
「は、はい……」

「ですからそれも兼ねて、次はトレーニングにうつります」
「はい」

——説明省略——

「毎日これを三セットやつてもらえば、すぐにもでも妖力を操れるよう
になりますよ」

「は、はい！」

(三セットかあ、なかなか辛そうだなあ……でもやらなきや……)

「では教えるのはこれくらいですね」

「あ、ありがとうございます！」

「いえいえ。それよりも、教えることに集中しそぎて気がつきません
でしたが、もう夕方だつたんですね」

「え？」

慌てて空を見る。

「あ、ほんとですね！ 私も気がつきませんでした」

私と榊さんは笑い合う。

「では、お腹も空いてきましたし、夕飯にしましようか」

「はい！ そうしましようか！ あ、私も手伝います！」

「じゃあ一緒に作りましょうか」

私たちは笑いながら家に帰った。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

夕飯はとても美味しく感じ、久しぶりに誰かと明るく話しながら食
べることができた。夕飯の後は、食器を片付けて寝転んでいた。しか
し、寝転んでいる時にふと気づく。

「あ、こういう時間にトレーニングやつておけばその分早く使いこなせるようになるんじやない?」

そう自分に問い合わせて、

「そうだね。よし、やろう」

と、自問自答をした。

この場面を榎さんに見られていたらと思うと、とても恥ずかしい気持ちになつた。

私は気持ちを切り替え、トレーニングに集中する。

「言われた通りにやつていけばいいんだよね……」

順調に一セット目、二セット目とこなしていく。

「ふう……はあはあ……意外と体力使つてて、辛い……」

そうして三セット目をやる。

「ふうう……疲れた……」

息が荒くなる。

(辛い……でも、辛くない特訓なんてない……これをこなしていけば、必ず……!)

自分に言い聞かせてトレーニングを乗り越える。

三セット目を終えたちようどその時

「柊さあくん!」

と、榎さんの声が聞こえてきた。

「はあ~い! 今行きます!」

と、返事をする。

「どうしたんですか? 榎さん

「ちよつと来てもらえますか?」

榎さんの声が震えている。榎さんに近づく。

「あの……あ、あれ……」

榎さんが指を指した方を見る。そこには蜘蛛がいた。

「柊さんは、早く……!」

「…………榎さんもしかして蜘蛛ダメなんですか?」

権は半分涙目になりながらゆつくりと首を縦にふった。

「お願いします……あ、あれ、あれをどこかに……」

「わかりました！ わかりましたから、泣かないで大丈夫ですから！」

「いえ、泣いてなんかないですよ……」

「権さん。涙目ですよ」

そう権さんに言うと、権さんは下をむいた。

「すぐに逃しますから。大丈夫ですって」

私は早々と蜘蛛を追い払つた。

「はい、権さん。もう大丈夫ですよ」

私がそう言うと権さんが咳払いをして言つた。

「あ、ありがとうございました。さつきは見苦しいところをお見せしちゃいましたね……すみません……」

（いや、涙目の権さんも可愛かつたから私としてはよかつたけどなあ……）

内心そう思いながらも冷静を装いながら言う。

「いえ、大丈夫です」

その後沈黙が続き、気まずい空気になつたので、私は話しかけた。

「で、ではもう寝ましょうか！」

「そ、そうですね！ では、柊さんおやすみなさい」

「おやすみなさい」

私と権さんは寝床についた。

拾肆巻／裏／

時が経つのがはやく、特訓から早二週間が過ぎていた。

私は時間があれば、特訓をしていた。そのおかげで、私は能力を使いこなせるようになっていた。

「柊さん、だいぶ能力使えるようになつてきましたね」

櫂さんは私を見て言う。

「操れるようにはなりましたけど、でも実際、能力と妖力だけですし、戦闘なんてまだまだ先だと思います……」

櫂が一瞬その言葉に反応する。すると櫂さんは、

「柊さん、ちょっと外に来てもらえますか？」

と言い始めた。

しかし私には何のことかわからない。

「え？ どうしたんですか？」

私は言われるままに、櫂さんについていく。

櫂さんは外にでるなり、

「柊さん、これを持って下さい」

と、木刀を渡してきた。

「櫂さん……？ な、何をするんですか？」

しかし櫂さんは、私のいうことを無視して、

「私がやめと言うまで、戦って下さい」

「へ？ な、なんですか！ 私が戦えるわけないじゃないで s……」

「なんでそう否定するんですか……」

櫂はそう呟いた。

しかし、私にはよく聞こえなかつた。

「え？ 何ですか？」

「なんでもないです。行きますよ」

櫂さんはそう言うのと同時にこつちに向かつて飛んでくる。

私は、弾幕をバラまく。

しかしそれを全て回避され、右側から木刀で叩かれる。

「……いッ！」

飛ばされながら、体制を立て直す。

樋さんの一撃が重い。今の一撃でも相当なダメージだ。

(このままじゃもたない……せいぜいよくても、二分かそこらしか持たない……はやく能力を使って隠れないと……でも、樋さんが見ていては、能力が……！)

柊の能力は、透明化できる程度の能力である。

概要を説明すれば、柊自身も消えることができ、柊がものに触れ、妖力を少しでも送らせれば、その触れたものも透明にすることができる。

しかし、どんな能力にもデメリットがある。そして、柊が使うこの能力は、二つのデメリットがあった。

一つは、柊以外の人、妖怪などが触れると、透明化の能力が無効化されること。そしてもう一つは、柊が他人に見られている間は、能力が発動できないということである。

透明にするところを見られてしまうと、能力が発動しないのだ。そして今は、二つ目に言つた、見られているという条件があるため、能力が発動できないのであつた。

柊さんの木刀を弾き返す。そして隙があれば、すぐに弾幕をはる。
(だめだ、この繰り返しじやいつまでたつても終わらない!)

私は、空中へと逃げる。すぐ後ろを向き、スペルカードを唱えようとする。

しかし、樋さんはそんなに甘くはなかつた。

私にあけられた差を、一瞬でつめていた。

「は、はや……」

樋さんの肘が私の鳩尾にはいった。

「ガツ……！　かはつ……」

そこに追い打ちをかけるように、叩き落とす。私は木にぶつかりながら落下していく。

「ガツ……！　は……ア！　ああ……うう……」

うまく息を吸うことができない。意識は朦朧とし、視界が歪んでいて、おまけに頭には激痛がはしる。立ち上がりろうにも、体が動かない。

そこへ正面から、歩み寄る人影があつた。

樋さんだつた

なんとか呼吸を整え、息ができるようになつたが、喋ることができない。

樋さんが近づいてくる。

私は何もできずにいた。そんな私を樋さんは一瞬見る。そして、何の前触れもなく、私の脇腹におもいつきり蹴りをいた。

「グハッ……！」

私は吹き飛ばされ、木にぶつかる。

「柊さん、はやく立ち上がって下さい」

その言葉を言つた樋さんの目は、一瞬悲しんでいるように見えた。しかしそれを遮るように、樋さんが私の背中に木刀を叩き込む。（なんで……なんで……）

樋の攻撃を喰らう。

（なんで……）

樋さんはやめない。

何かを感じ取つた樋の動きが止まつた。

その何かは、今まで感じたことのない、妖氣……いや、邪氣とも言えるほどの氣だつた。

樋は気のせいかと思い、そのまま柊に攻撃を加えようとした。

その時、柊の体が消えた。

拾伍巻／榊の想い

「なつ……！ 消えた!?」

今起こつた出来事に、榊は動搖する。気配を探つてみるも、周囲には柊の気配を感じない。

「一体どうやつて……」

考えてみるが、いつまでもこうしてては、何も始まらない。

榊はあたりを探し始める。

これは、柊の言葉によつて始まった。

自分は戦闘なんてできない

榊はそれを聞いた時に、そんなことは無いと思つていた。二週間であそこまで成長したのは、榊でも驚きだつた。

だから楽しみにしていた。もうすぐ柊さんと一緒に戦えるのではなかいかと。

しかし柊は戦えることを否定した。

だから榊は、柊が十分に戦えることを自分でわかつてもらおうと思ひ、無理やりこの戦闘を仕掛けたのだった。

たとえ榊が言葉で「戦えますよ」と言つても、否定することがわからきつっていたから。

戦闘中に追い込むことでしか力を引き出させる方法が無く、結果としてこうなつてしまつたのだつた。

そして戦闘を始める。

榊は、柊が十分に戦えることをわからせようとするのに必死だつた。しかし、わからせようとして柊を攻撃するのは、同時に榊の心も傷めていた。

自分が今一番好きだと言える人を攻撃しなければいけなかつたから。

柾は柊が来てから、毎日が楽しくて仕方がなかつた。女性の白狼天狗も少くないのだが、今までこんなに明るく楽しく話せた白狼天狗はいなかつたからだ。

だからせめてもの恩返しとして、柊にきづかせたかった。

これを恩返しというのかはわからない。でも、柾は自分が返せることとして何があるかを自分なりに必死に考えた。考えた末、これにたどり着いた。

もしかしたら柊に嫌われるかもしれないという可能性も考えた。だが、それを恐れて柊の力を使わせないまま終わることのほうが柾としては辛かつた。

だから、柾はこの戦いを無理矢理行つた。

そして今に至る。

「もう少し、もう少し……」

柾はつぶやく。

「もう少しで力にきづくはず……！」

先ほど、あれだけの気を発せることができたのだ。

「だから探して、最後に一言言えば、絶対に……！」

後ろに気配を感じる。

(あの気だ……)

柾は後ろを向く。そこには柊が立っていた。

柾は思つていたことを言う。

「柊さん！　あなたはあれほどの能力をもつてゐるんです！　さつきのでわかつたはず！　柊さんは自分で気づいていないだけで、実際はもつと強いんです！　だから、柊さん！　あなたは十分戦……え」さつきまで数メートル離れていたはずの柊が、一瞬にして目の前にいたのだ。

(ツ……！　はやい！)

柾が後ろに避けようとする。

柊が、スペルカードを唱える。

「吼符『天の咆吼』」

(あれは音のスペルカード！　まざい、耳が……！)

耳を塞げずに、近距離で聞いてしまう。

頭に響き、視界が歪む。

権がふらつく。

そこに柊が容赦なく、攻撃をする。腹に一発、脇腹に一発、背中に一発いれ、木刀で薙ぎ払う。

その剣さばきは、今までよりも数倍速かつた。木に直撃し、背中に激痛がはしる。

権が一瞬でここまで喰らうことは初めてだつた。今までにないほどのダメージを負い、権は立ち上がり難にいた。

(仕方ないよね…………こんなになつても……だつて、それだけのことを見たんだから……)

権は戦闘してる裏で、恐れていたことがひとつあつた。

それは、柊の力、能力が権では抑えきれなくなつてしまうこと。いわゆる、柊の力の暴走であつた。柊が強いことはわかつていた。しかし、その強さがどこまでなのかは予測がついていなかつた。だから暴走した時に止められない可能性があつたため、これを恐れていた。

そして今、恐れていたことが起きている。

柊がゆっくりと近づいてくる。

暴走しているため、もう柊を止められない。

誰が味方なのか敵なのかわからない状態のようだ。

また、攻撃したら殺してしまうかもしれない、かといつて何もしないと殺されてしまうかもしれない。

だつたら、自分の好きな人を殺してしまいくらいなら、自分が死んだほうがましだと思つていた。

「柊さん…………ごめんなさい……」

ここで奇跡がおきた。

目の前で柊の動きが止まつた。

そして止まつてから数秒後、柊は倒れた。同時に柾の意識はそこで途絶えた。

「……じ……ん！」

遠くから声がする。

「も……さん！」

どこか聞き慣れた声。

「柾さん！ 柾さん！」

この声は……と柾は目を開ける。

「柾さん!!」

視界には柊がうつつていた。

「柾さん！ 大丈夫ですか!? しつかりしてください!」

柾は体を起こそうとする。

「ダメです！ 寝ていて下さい！」

柊にせいされてしまう。

柾は覚えてる限り思い出そうとする。

（確かに柊さんを止められなくて……）

なぜあそこで止まつたのか柾には分からぬ。柾が柊に聞いてみたところ。

「いや、その……私もあんまり覚えていなくて……柾さんになんでこんなことされなくちゃいけないんだって思つていたら、急に意識が遠のいていつて……それで、しばらくした後柾さんの声が聞こえたんです」

柾は相槌を打ちながら聞く。

「あの、柾さん」

「はい」

「その傷はどうしたんですか？」

「この傷ですか？ これは柊さんがやつたんですよ」

「え？ 私…………がですか？ 本当にごめんなさい！ すみませんでした

！」

「謝らないでください。実はですね……」

権は、今回の戦闘の趣旨を話す。

「そうだつたんですか……でも、こんなに傷つけてしまつて……」

「いいんですよ、そうやつてひきだそうとしたのは私なので」

「でも……」

「もういいですから、気にしないでください。それよりも、柊さん。あなたにはこれほど力がついたんです。ですから、あなたにも十分戦闘はできます。だから……もう自分が無力だとは言わないで下さい。もつと自信持つていいですから」

「権さん……ありがとうございます……」

柊は泣き出してしまつた。

「柊さん……」

柊は涙を拭きながら柊の方を向く。

「本当にありがとうございます……」

「いいですつて。それより、一つ頼みたいことがあります」

「なんですか？ 私にできることならなんでも」

「その、私を総会場の医務室まで運んでくれませんか？」

「あ、はい！ すぐに連れて行きますね」

柊は権のおかげで、力に気付くことができ、権はそれを助けることができた。

二人は、笑いながら総会場へと向かつた。

拾陸巻／出会いの連鎖／

これは、榊が怪我をしていた時に柊が一人で哨戒任務をしていた時の話。

「はあ～……」

私はため息をつく。

自分では覚えてはいないが、なぜ榊さんにあんなことをしてしまったのかということに落ち込んでいた。

独り言に自分でツツコミを入れながら、山の見回りをしていると、誰かが倒れているのを見つけた。

「誰か倒れてる……」

倒れている人に近づく。近づいて初めて分かったが、その人は傷だらけだった。

「ひどい怪我……！　早く手当てしないと！」

手当てを始める。しかし、手当てをしようとした時に、その人が私に話しかけてきた。

「な……にやつて……巫女が……きちゃう……」

「巫女……？」

（巫女ってあの、よく神社とかにいる人達のことだよね。その人達が来る？）

私は訳がわからなかつたが、妙な胸騒ぎを感じた。

「そう……巫女、よ……博麗の巫女……一緒にいたら……あなたも……！」

「博麗の……巫女……？」

その言葉を口にした時、背筋が凍るほどの殺氣を感じた。足が震えだし、本能的に能力を発動させてしまう。

その人は私に言つた。

「ほら……来ちやつた……！　はや、く……！　今……なら、まだ……逃げられる……！」

その人が言つた時、もの凄い速さで巫女が来た。その人の表情は凍

りついていた。まるで死を覚悟したかのようだつた。

が、

思つていたのとは違う言葉が飛んできた。

「あれへ、おかしいわね。こつちに来たと思つてたんだけど……しかも途中で妖氣が消えてる……もう、面倒くさいつたらありやしないのに……」

博麗の巫女は目の前にいるのに、そんな言葉を述べて、どこかへ行つてしまつた。この不思議な状況を見て、驚かない人なんていないだろう。

案の定、その人は啞然としていた。

「え……なん……で……？　どうゆう、こと……？」

全く現状を把握できていないその人に、私は説明する。

「あの……実は、私の透明化にする能力で、透明にしちやつたんです」「え……」

説明したら、一瞬止まつたが、

「あ、そだつたの!?」

と、驚いて、興奮し始めた。

「あの、ありがとう！　本当に助かっちやつて……命の恩人だよ！」

あ、私は、水霧 双葉（みずきり ふたば）つて言うの。あなたは？」

「私は……柊、白神 柊」

「柊……柊！　ほんとうにありがとう！　感謝しきれないよ」

「ううん、私も力になれてよかつた。実際、足が動かなくつて本能で能力出しちやつたから」

私は逃げようにも、逃げられなかつたのである。でも、目の前の人々が困つてゐる状態で逃げ出そうとするのもそれは悪いことだ。だから、怖くても逃げなかつた。

ここで私は忘れていたことを聞いてみる。

「ところで、双葉ちゃん」

「ん？　なあに？　柊ちゃん」

「けが、大丈夫なの？」

双葉は自分の怪我を見た。

その後、双葉が倒れたのはいうまでもない。

私は、双葉ちゃんを手当てしながら思い出していた。先ほど能力を発動してみてわかったことを。

一つ目は、能力発動中は気配も消すことができる。私は、戦つたことがなかったので、実際に能力を特訓以外で使つたのは初めてだつたため、先ほど知つたのだ。

そして二つ目は、二人以上（自分と妖怪及び人）が同時に消える時、消えているものどうしを見たり、会話ができるということだつた。これも一つ目と同様に、使う相手がいなかつたため、先ほど知つたのだ。

私はこの二つを知つた時、相変わらず複雑な能力だと手当てをしながら思つていた。

…………

手当てをし終え、私と双葉ちゃんはとりあえず権さんのところへ向かっていた。権さんに双葉ちゃんのこと説明するためだ。

双葉ちゃんには、権さんのこと少し紹介しておいた。

「いやあ……一箇所に留まるのは好きじゃなくてね。この広い幻想郷を見て回つてたんだ」

「へえ？」

私は、双葉ちゃんが今まで見てきた景色のことを聞いた。

双葉ちゃんの話を聞きながら、まだ見知らぬ世界へと行つてみた。いな……と、思いながら、私達は権さんのところへ向かつた。

拾漆巻く 一つの過去く

私は樺さんに双葉ちゃんを紹介し、事情も説明した。

事情を聞いた樺は

「私はいいですけど……まだ一日ほど病院にいなくてはいけないみたいなので……」

「そう……なんですか……私のせいで、ほんと……ごめんなさい……」「だから謝らないで下さい。柊さんのせいじゃないんですから」

「でも……」

「大丈夫ですから。だから柊さん、家をおねがいしますね」

「うう……はい……」

・・・

私と双葉ちゃんは病院をあとにした。

「樺さんつて聞いてた通り優しい方だね！」

・・・・・

沈黙が流れる。

私は双葉ちゃんに言つた。

「樺さんが今あそこにいるのは、私のせいなの」

双葉ちゃんは驚いたようだが、真剣に話を聞き始める。

私の声は自分でも分かるほど震えていた。

「私はつい最近妖怪になつたばかりで、弱かつた……足を引っ張るばかりで、お荷物で……だから周りの人や樺さんに迷惑かけちゃつて……」

今にも泣き出してしまいそうなほどの声で話し続ける。

「もう、迷惑かけたくないくて……強くなりたくて……！　なりたくて、特訓も続けた……！　……でも私は、その特訓をしている時に、まだ自分に自信がなくて、戦えるということを否定しちゃつた……そしたら、樺さんが気を使つてくれて、私が……私自身が戦うのに十分力を持つてるということをわからせてくれたようとしてくれた、なのに私は……！　そんなこともわからずに、樺さんを傷つけてしまった！　だから、今……樺さんが大変な目にあつているのは私の……私のせいな

の……」

私の頬に涙がつたつていた。自分のせいなのになんで泣いているのだろう。泣いてはいけないのに、勝手に涙が溢れてくる。

今の話を聞いていた双葉は、柊に近づき柊を抱きしめた。

「そうだつたんだね……一人で抱え込んで……私にもわかるよ、その気持ち。迷惑をかけたくないって気持ち……苦しかったよね。自分のやつてしまつたことで自分を追い込んで……柊ちゃん、こんな私も力になりたい。柊ちゃんが苦しんでいるところを見たくないから。だから……もし何か私に出来る事があるならしてあげたい。相談でも、話相手でも、何でもいいから。私に何かできることがあれば言って？　柊ちゃんは私にとつて恩人だから」

そう言い終えると、双葉は柊の顔を上げた。

「!？」

さつきまで泣いていた柊が、涙を流しながら頬を赤く染めた。

双葉が柊の口の中に舌をいれていく。口の中で舌が絡みあう。甘くとろけるような感覚で体も火照り出してきた。その感覚は、時間も忘れさせてしまうほどだつた。

双葉が口を離す。

「ほら泣かないで……つて、大丈夫？」

柊は完全にショートしてしまつっていた。

「ねえ、大丈夫？」

双葉の呼びかけに、柊が我にかかる。

「ちよ、ちよつとお！ な、なに！ 何してるの!?」

「何つて？ キスだけど？ 深い方の」

「深い方つて……！ ていうか、なんでキスするの!?」

「だつて、落ち込んでたし。した方がいいのかなって？」

「なんでそういう考えになるの!?」

「なんとなく？」

「なんとなくつて……！ 双葉ちゃん……」

「ほら、元気になつたからいいじゃん！ 言つたでしょ？ 苦しんで
るところは見たくないって」

思つてみれば、柊が泣いていたから励まそうとしてくれたのかもし
れない。

（だけど、キスなんて卑怯だよ……）

「双葉ちゃん……ありがと」

「明るくなつてよかつた！ ジやあ、いこ？ 梶さんのおうちに」

「うん！」

拾捌巻／繰り返される夢『回夢』／

私と双葉ちゃんは、楓さんの家についた。

「ここが楓さんの家だよ」

私は双葉ちゃんに言つて、家中に入ろうとするが、双葉ちゃんは立ち止まっている。

「双葉ちゃん？ どうしたの？」

「ううん。なんでもないよ。すぐ行くね！」

それを聞いた私は家中に入つていった。

家中に入つていく柊を見届けた双葉がほくそ笑んだとも知らずに。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「お腹すいたね。何か食べる？」

「そうだね、なんか食べたいかも！」

「じゃあ、適当になんか作るね！」

そう言うと、柊は台所に行つた。

双葉は、柊が準備を始めたのを確認すると、音をたてずに、立ち上がりつた。そして、足音をたてずに柊に近づいていく。

柊は食材の準備を始める。切ったものを鍋に入れ、次の食材を切りうとした。

しかし、

「あれ？ 包丁がなくなつてる」

つい先程まで使つていた包丁が見当たらない。

そう思つた時だった。

腹部に鈍い痛みが走つた。

「え……？」

腹部に手を当ててみると、ぬるぬるとした感触があった。触った手と服が赤く染まつていく。

「なん……で……？」

徐々に、血が出ているという状態を把握し始める。口から血を吐き出す。床にも血が広がっていく。

しかし、全てを把握する前に、全身から力が抜けていった。意識が遠のいていくなか、一人の人物が目に入った。

（双葉……ちゃん……？）

双葉だと認識した後、柊が最後に見たものは……

血で赤く染まつた包丁を持って、幸せそうな笑みを浮かべている双葉だった。

「はあ……！　はあ……はあ……」

なぜか私は、布団にいた。

腹部を触つてみると、血は出でていなく、傷もなかつた。

「夢……」

さきほどのものが、夢だと脳が認識し始める。しかし、夢とは思えないほどリアルだった。

最近、よくこんな感じの夢を見てしまうようになつていた。
誰かが誰かに殺される夢……。

中でも、ここ最近で見た一番つらかった夢、それは柊が思い出したくない、心の奥に閉まつてあつたはずの記憶だった。

それは、柊の両親が死んだ時のことだつた。

あの日のことを体が本能的に記憶の奥底にしまいこんだはずなのだが、夢に出てきてしまつていた。

しかもそれが夢に出てきた時、柊はその日の夕方まで目覚めなかつた。

寝ながらそのまま気を失つていたのだ。

柊にとつてそれほど、辛い記憶なのだ。

「どうしたんだろう……疲れてるのかな……」

夢の最後に見たシーンを思い出す。思い出しただけでもゾッとする……。

双葉ちゃんのあんな顔を見たことがないし、まして、そんなことするはずがないと私は思つている。

とりあえず呼吸を整える。

そして、まず双葉ちゃんが何をしているのかを確認しようとしたが、タイミングがいいようで、双葉ちゃんが部屋の中に入ってきた。

「柊ちゃん、大丈夫？ 頬真っ青だよ？」

双葉ちゃんにはなしかけられる。

私は、警戒していることを双葉ちゃんにさとられないようにしながら話を続ける。

「う、うん。大丈夫だよ。ごめんね、心配かけちゃつて」

「ううん。いいの。でもまだ顔色悪いよ？ もう少し休んでたほうがいいかも」

「ありがと。でももう、大丈夫だから……あのさ、一つ聞いていい？」

「なに？」

「私つてどうなつたの……？」

恐る恐る聞いてみる。

「ああ……家の前でいきなり倒れたからびっくりしちやつたよ。入ろうとしてたら、倒れたから」

「そうだつたんだ……ほんとごめんね？」

「いいよ！ でも、もう寝たほうがいいかもね」

「そつか……じゃあお言葉に甘えて、今日は寝させてもらう。ありが
とう。ほんとに」

「いいよ、気にしないで！　じゃあ、おやすみ～」

「おやすみ」

拾玖巻／心の箱の知らない事実／

「んつ……」

窓から朝日が差し込んでいる。
私は体を起こす。

「ふわあああ……んく！」

大きく伸び、台所へと向かう。

「あれ、双葉ちゃんがいないな……どこ行っちゃったんだろう」

「双葉ちゃん!!」

家の中を探してみるが、どこにもいない。

「どうしちゃつたんだろう……」

私が心配していると、

「たつだいまー！」

聞き覚えのある元気な声が玄関から聞こえてきた。

「双葉ちゃん！ どこ行つてたの!? 心配したんだよ!?」

双葉ちゃんのいる玄関へと向かう。

「ごめんごめん！ ちょっと人里に買い物しに行つて……て……」

靴を脱いで上がろうとしていた双葉ちゃんが、急に動きを止めた。

「へえ～人里なんてあつたんだ……つて双葉ちゃん、どうしたの？」

「柊ちゃん、もしかして……ついに……」

「え？ な、なに……？」

「まだ出会つてそんなに経つてないけど……柊ちゃんつて意外と大胆だね……！」

双葉ちゃんが照れる仕草をする。

「え、ど、どういうこと?」

「だつてそんな格好してるから、準備はできてるんでしょ……？」

双葉ちゃんに言われて気が付く。

私の片方の肩はあらわになつており、胸の部分ははだけて、裸足だった。

「ねえねえ」

「い、いや、ちがつ、これは……」

「……いいんだよね？」

双葉ちゃんが私に詰め寄る。

「だ、ダメだつてばあああああ！」

…………

「で、食材とか買つてきたんだけど」

双葉ちゃんが袋から買つてきたものを取り出す。

「いつたくい。別に本気で言つたんじやないのに」

「いやあれ絶対本気でしょ」

先ほどの騒動は私が正当防衛でやつてしまつたビンタによつて、その場はおさまつた。

勿論その後、私のお説教があつたのは言うまでもない。

「つて、さつきも言つたけど、人里なんてあつたんだ」

「え？ 知らなかつたの？」

「だつて私、山から出たことないよ？」

「ええええ！ そだつたの！」

「う、うん」

「じゃあさ、じゃあさ！ 行つときなよ！」

「へ？」

「だから、行つときなつて！ 人里！ 楽しいし」

「え……で、でも……」

「大丈夫だつて！ これで好きなものでも買つときなよ！」

「私がしておくからさ！」

「じゃ、じゃあ……行つてこようかな」

「よしきた！ このまま真つ直ぐ行つた所にあるから！」

「分かつた。……じゃあ、留守番頼んだよ？」

「任せといてよ！」

「じゃあ、行つてくるね」

私はそう言うと人里に向かつた。

双葉は、柊が出て行つたのを確認すると、

「楽しめるといいな。外の世界に。それにしても、ふわあああ……眠
い……」

この前の疲れが残つてゐるのか、双葉は眠つてしまつた。

・・・

「あゝあ、暇だなあゝ……面白そうな事起きないかなあ……」

一人の妖怪はそう言つた。

「でもまあ、起きないなら自分で起こせばいいか。今までそうだつたし。てか、妖怪の山に行けば天狗がいるつて聞いたけど……全然い
ないし……」

山の中を歩きつづける。

「ん？　あれつてもしかして天狗？」

その妖怪の視線の先には、一人の白狼天狗がいた。

「やつと、みくつけた。さて、どんな風に楽しませてくれるかな？」

その妖怪は下準備をし、天狗に攻撃を仕掛けた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「このまま真っ直ぐだよね……」

柊は歩いて人里に向かつていた。

「そんなに遠くないつて聞いたけど……」

そんなことを考えながら歩いていると、近くの草むらから音がした。

急な音に柊は反応して身構える。

身構えた後、音のしたほうから針が飛んできた。柊はそれを難なく避ける。

「だれっ！」

「いや～悪いね。ちょっと話がしたくなつてさ」

針が飛んできた辺りから出てきたのは、青髪で見た目が今で言う中学生ぐらいの身長の男だった。

「話したいじゃないでしょ、理由は。なんで攻撃してきたの」

警戒しながら聞く。

「バレちゃったか。仕方ない。いや、あのね、最近そんじよそこのらの妖怪だと物足りなくつて飽きてきたからさ。で、そんな時、妖怪の山には天狗がいっぱいいるって聞いてね。プライドの高い天狗だとどうなるのかなって思つて。あ、自己紹介まだだつたね！ 僕は夢宮幻（ゆめみや げん）って言うんだ！ 覚えられたら覚えてよ！ で、お姉さん、名前は？」

「言うわけないにきまつてるでしょ。あなたの話を聞いていたけど、結局どうしたいの？ 戰いたいだけなの？」

「戦う？ とんでもない。そんなことしないよ」

「じゃあ、何がしたいの……？」

「僕の目的……それはね……お姉さんみたいな天狗が狂つているところを見ることがだよ！」

幻が言い終えた後、暗い世界に閉じ込められる。

「な、なにを言つてるの……？」

「さあ、お姉さん……僕を楽しませてね！」

「こんなの……狂つてる……！」

幻が針を飛ばしてくる。柊は飛んでそれを避ける。

「そうだつた。天狗つて飛べるんだつけ。だつたら……」

幻が何か小声でつぶやくと、幻の体が空中に浮いた。

「これで対等だね！」

しかし、柊はニヤツと笑つた。

「残念だつたね……空中で天狗と対等だなんて考えちゃダメなのにな！」

柊は斬りかかりに行く。幻が避けるそぶりはない。柊は力いっぱいい剣を振る

が、

「え……？」

なんと剣は幻の体をすり抜け、空を切つた。

「な、なんで!?」

「あつはつは！ お姉さん面白いよ！ いいよ、特別に教えてあげる。僕の能力。僕の能力はね、別次元に体を移すことができる能力なんだ。だから、お姉さんの攻撃は、当たらないってわけ。いる次元が違うからね。体は見えるけど、場所じやなく、次元がちがうつてこと。わかる？」

挑発するようにまくしたててくる。

しかし、相手の挑発に乗つてしまつたらそこで終わりだ。柊は冷静を装おう。

「次元は違えど、いる場所は変わらないのなら、そこに閉じ込めてしまえば終わり！」

柊はスペルカードを使う。

「圓符『ウインドケージ』！」

風が巻き起こり、幻を包み始める。風が具現化し、檻の形になつた。「たとえ場所を移動しても、この檻は中にいるものを逃がさない！」

しかし、風の檻の中を見ても幻の姿はなかつた。

「なんで檻の中にいない!?」

柊には全く理解できなかつた。抜目のないあの風の檻からどうやって脱出したのか。

後ろから笑い声が聞こえてくる。

「あつはつはつは！ いや、さすがは天狗と言いたいぐらいだよ！ こんなに楽しいのは久しぶり！ でもね……まだまだこれからだよ！」

「くつ……！」

…………

「いや、実に滑稽だな」

草むらの中にいる幻はつぶやいた。

「まさかこんなにあつさり僕の『幻覚を見せる程度の能力』に騙されちやうなんて。周りから見たらただ一人で何かやつてるようになしか見えないんだけどね。あのお姉さんは一生懸命僕の創りだした幻覚と戦ってるね」

「さて、そろそろ僕のこの能力のもう一つの使い方をしておわらせてあげようかな」

幻の能力には、二通りの見せ方があった。

ひとつ目は、自らが創りだしたものを作手に見せる使いかた。

もう一つは、相手の記憶からトラウマを引っ張りだし、相手に思い出させる見せ方であった。

もちろん、二つの見せ方に欠点はある。

ひとつ目の見せ方の場合、自分が見たことのあるものではないと創りだすことができない。

もう一つの見せ方は、相手にトラウマが無かつたり、トラウマだと思つていなかつたりすると発動できない。

この二つが欠点であつた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「はあ……はあ、はあ……」

何度もやつても同じことだつた。なぜか私の体力だけ削られていく。
「無駄だとわかつていてもやるんだね。それはプライドとかなのかな？」

「はあ、はあ……うるさい……」

「まあ、いつか。そろそろファイナーレといこうか。ここからが楽しいんだよ……！」

私は剣を構えた。

「お姉さん、さつきは嘘ついちゃつてごめんね。前半戦は楽しませてもらつたから、お礼に本当の能力を教えてあげるよ」

幻が無駄に話している間に私の呼吸は整えられていた。

「本当の能力……？　ということは嘘だつたのね」

「うん！　そのほうが楽しめると思つてね。実際楽しめたし」「それで、本当の能力は……？」

「僕の能力はね……幻覚を見せる程度の能力だよッ！」

そう言つた時、一瞬にして柊の視界が真っ暗になつた。

「何っ!?」

「僕には二つの幻覚の見せ方があつてね、一つはさつきみたいに、自分で創りだす方法……」

（そりか！　だから攻撃があたらなかつたのか！）

「もう一つはね……これからやつてあげるよ……！」

幻が言い終えた瞬間、目の前に見慣れた景色が現れた。

「この景色つて……私の家……？　なんで……？」

幻が話を続ける。

「もう一つの方法はね……相手の過去を具現化するんだよ。それはその人が知つてる過去も、知らない過去も、一連のシーンとして流す。区切りのいいところまでね」

それを聞いて私はきづく。

「じゃあ、もしかしてこの景色は……」

全身が震えだす。

心の奥深くにあつた記憶がよみがえる。目の前で映像のように流れ始める。

そして……。

「お父さん……お母さん……！」

まだ生きていた時の私の両親がうつる。

私はこの先の未来がわかる……

そう思うと、自然に涙が溢れてきた。

そして、次の瞬間……。

家の中に刃物を持った男が入ってきた。

お母さんが、私を守るように抱きしめている。その中で私が声を押し殺して泣いている。お母さんを刺そぐと刃物を持った男が近づいてきた。

刃物が振り上げられる。

そこでお父さんが私達をかばう。

お父さんの体から、赤い液体が流れている。

「あっ……あ……ああ……」

自然と声が出る。

今の私にはただ映像を眺めることしかできない。

刃物を持った男は次にお母さんを刺しに来た。

私をかばうようにして、そして倒れた。お父さんと同じく、赤い液体が流れていた。私の前に刃物を持った男が立っている。それを、昔の私は怯えて見ている。

脇腹を思いつきり蹴られた。

私の精神は崩壊寸前だった。

そして、この時初めて気がついたこともあった。

お父さんがおきあがり、私を守ろうと、必死になつて男と戦つていた。

しかし、傷を負つたお父さんが勝てるはずもなく……

そして私は見てしまった。

蹴られて気絶している間のことを。

男は、お父さんの心臓に刃物を突き刺し、下腹部まで一気に切り開いた。そして、さらに八つ裂きにしていく。あまりの惨状に、私は吐いてしまった。

そして目の前で愛していたお父さんが八つ裂きにされていくのを見てしまった。

……柊の精神は壊れてしまっていた。

「うふふ……はは……」

目は光を捉えていない。涙が流れているだけの瞳……。

柊はただただ笑っていた……。

「やつぱりこの壊れる瞬間がたまらない……！ ゾクゾクするんだよ
ねえ！」

壊れた柊を見て言つた。

「これからどうなつていくのか……楽しみだ」

式拾巻(式)変化(化)

——夕刻——

「ただいま帰りました」

樺が帰ってきた。

しかし家中から返事はない。

「柊さん、双葉さん」

台所に向かうと双葉がいた。

「双葉さん」

呼びかけてみても、返事がない。

樺は双葉の顔を覗きこむようにして見る。

双葉は寝ていた。

樺はしばらく迷つたが、申し訳ないと想いながらも双葉を起こす。

「双葉さん」

「んっ……ん……？」あ、樺さん、おかえりなさい」

双葉が目を一すりながら体を起こす。

「ただいま。双葉さん、柊さんは？」

「あれ、柊ちゃんなら、人里に行つたはずけど……」

「いつからですか？」

「昼過ぎくらいだつたかな……今つて何時です？」

「だいたい申の刻ぐらいですかね」

「申の刻……人里にそんな長くいるかな……さすがに遅すぎるか……？」

「確かに遅いかもですね……何かあつたんでしょうか……」

「……ちょっと私探してきます」

「だつたら私も……」

「いえ、樺さんは退院したばかりなので、待っていてください」

「いや……そうですね……分かりました。では、お任せします」

「はい。あと……」

「ん？ 何ですか？」

「樺ちゃんって呼んでもいい？」

「いいですよ」

桜はニコッと笑った。

「じゃあ行つてくるね」

「はい、気をつけてくださいね」

桜が言い終えると、双葉は桜を探しに行つた。

「柊ちゃんどうしたんだろう」

そう言いながら人里へ向かつてゐる時に、前に見慣れた姿を見つけた。

「あれって、柊ちゃんかな」

確認のため、近づいてみる。

「やつぱり壊れた姿を見るのは楽しいなあ……何しても抵抗しないし」

柊の体にはアザができ、服はところどころ破け、擦り傷や切つたような傷がたくさんあつた。

「まだまだいじめていたいなあ……」

そう呟いたら、声が聞こえてきた。

「……どうしちゃつたんだろ……」

「あ～あ、誰か来ちゃつたか……しようがない、ここまでか……次の獲物でも捕まえようかな……」

そういうと幻は去つていつた。

前にいたのは、やはり柊だつた。

「柊ちゃん！」

柊に近づく。

しかし、柊は傷だらけだつた。

「柊ちゃん！ どうしたの？」

呼んでみるが、反応がない。肩を叩いてみる。

「ねえねえ、柊ちゃん？」

やはり反応はない。

「ねえ！ 桜ちゃん！」

顔をこっちに向けさせる。

「ツ！」

その時、双葉は気づいた。桜の目は、双葉を捉えていない。目に光がないということを。

（こんなのは、桜ちゃんじやない……何かあつたんだ……とりあえず連れて帰らなきや……！）

双葉は桜を連れて帰った。

式拾壹巻／崩れた過去

殴られても痛みは感じない。

もうどうにでもなれという気持ちしかなかつた。

たとえ幻覚でも、家族が死んだときのこと、自分は見ていなかつた真相を最後まで見てしまつたら、普通でいられるわけがない。

まして、柊は元々人間であつたこともあり、人間としての感覚も残つてゐる。

だから、平然とすることができないのも当然だろう。

この事件が起きたとき、柊はまだ幼かつたため、脳が無意識に柊の両親の死を受け入れることを拒んだ。

柊は昔、自分の両親はどうしたのかと聞いたことがあつた。

その当時おばあちゃんから、事故で亡くなつたと聞かされた。

脳はそれを信じ込み、勝手に記憶を改ざんしていく。

人間の場合だと、そういうことが多い。

自分の都合のいいように、記憶を捻じ曲げて変える。

そしてそのまま、思い出さず、消えていく。

しかし、柊がそうだと思い込んでいたものとは違う現実、すなわち実際にあつた出来事をもう一度見てしまうことにより、忘却の彼方にあつた心の闇がもう一度動き出し始める。

それにより、幼い頃にはなかつた多くの感情が一気に溢れかえる。そして、それと同時に現実を受け入れ始めるため、自分では気が付かないうちに徐々に精神が崩れ始める。そして気づいたころには遅く、壊れてしまつていることが多い。まさに今、柊はその状態だつた。

「お父さん……お母さん……」

柊は、つぶやくことしかできずにいた。

しかし、そんなことお構いなしに、幻は殴り、蹴り続ける。

それが、いつまでも続く……。

しかし、暫く経つた後、急にそれが止まつた。だが、終にはそんなことどうでもよかつた。

自分の大切な思い出、一緒にいた時間、家族みんなで笑つた日々……その全てがバラバラに崩されてしまつたようだつたから——

もう今は、体に力が入らず、つぶやくこともできずにへたり込んでいた。

頭の中では家族との思い出とあのシーンが交互に繰り返される。おそらく今の終には、何も視界に入つておらず、声も届かないだろう。

しばらくすると、誰かが終の体を持ち上げた。

この匂いは終のかいだことのある匂いだつた。

その人物は、双葉だつた。

しかし、終はそれが分かつた時、自分の闇に吸い込まれるように意識を失つた。

「楓ちゃん！」

双葉が慌てた様子で帰ってきた。

「どうかしたんですか!?」

楓が尋ねると、双葉は目に涙を浮かべ、泣きそうな声で言い出した。
「柊ちゃんが……柊ちゃんが……！　私のせいだ……私が、人里に行つてきなつて言つたから……」

双葉が涙を零し始めた。

「ちよ、ちよつと待つてください！　柊さんは、どうなつたんですか……？」

「今、私が見つけたときには、服はもうボロボロで、傷がひどくて……呼びかけても返事がなくて……どうしよう、私……」

楓が双葉を落ち着かせる。

「双葉さんは悪くないんですよ。悪いのは、柊さんをこんな目に合わせたやつです。ですから、双葉さん。泣かないでください。悪くないんですから。……双葉さん、いつもの明るい柊さんに戻すために、一緒に敵を探しましょう？」

双葉は、泣きながらうなずく。

「ありがとうございます。私はこんなことをした人を絶対に許せません。ですから、絶対にみつけましょう。柊さんのために」

「……うん」

「では、私はまずこのことを、大天狗様に報告してきますので、報告から戻ってくるまで、待つてもらえますか？」

「うん、分かった……」

「じゃあ、行つてきますね」

「うん。気を付けて……」

「はい」

そういうと、楓は飛んで行つた。

式拾式巻く奇妙な出来事く

——大天狗の部屋——

「失礼します。哨戒班の犬走 梶です。少し気になることがありますので、ご報告に参りました」

「うむ、入れ」

襖を開けて中に入る。

「で、気になることはなんじや」

「実は柊さんのこととして」

大天狗が一瞬驚きの表情を見せる。

「柊がどうかしたのか？」

「はい、実は本日、柊さんが人里に行つたようなのです。それで、なかなか帰りが遅いので、探しに向かつたのですが……」

「もしや、見つかっていないのか？」

「いえ、いたのですが、その見つけた場所が人里へ向かう道の途中だつたのです」

「それは、帰り途中だつたからなのではないのか？」

「いえ、人里には行つていらない様子でした」

「そうか……気になることはそれだけか？」

「いえ、まだあります。柊さんを探し、その時の見つけた状態が明らかにおかしいのです」

「どういうことじや？」

「見つけたときの状態が、体中が傷だらけで、呼びかけても返事がない状態でして、まるで魂が……」

その時、襖が強く叩かれ、一人の天狗が入つてくる。

「大天狗様！ 大変です！」

とても焦っているようで、部屋は緊迫した空氣に包まれる。

「つい先程から各班より、奇妙な出来事が起こっているとの報告が入りました！」

「どうか、ご苦労。で、その奇妙な出来事とはどんなものじや」

天狗が悦明を始める。その内容は、つい先程梶が大天狗に伝えたも

のとほとんど一緒だつた。

この話を聞いた大天狗は少し考える。

「これは……一度集めたほうがいいか……」

「各班に一度総会場に集まるよう連絡せい！」

「はっ！」

天狗は足早に去つていった。

「樺、おぬしは家に戻つたりする用事はないか？」

「ありません」

「そうか。では、このまま総会場に向かいなさい」

「はい、分かりました」

樺は早々と総会場に移動した。

…………

つい数分前に連絡がまわつたばかりだというのに、総会場には既に大半の天狗が集まつていた。足りない分は、恐らく柊と同じ目に合っている人たちだろう。

大天狗が話し始める。

「さて、集まつてもらつたのは他でもない。今この山で起つていてのことについてだ」

会場内がざわつく。

「まあ、知らぬ者もいるだろから説明はしておく」

大天狗が説明を始めた。

要点をかいづまんで話しているので分かりやすく、短時間で全員が理解をしているようだつた。

「今回の件は、誰かが意図的にやつていると考えておる。だからわしらが今やることは、今この奇妙なことを起こしている元凶を見つけ、それを食い止めるこじや。これ以上犠牲者を増やさないためにも、今この出来事の被害者を元に戻すためにも、絶対に犯人を見つけ出すことがわしらのやるべきことじや。わかつたら山中を探して、見つけだせいい！」

「はっ！」

一斉に、天狗が班ごとに集まり、探しに向かう。

「梶も自分の班のところへと向かう。

「梶、無事だつたか。お前がいないとこれは辛いからな」「ええ、私の能力で犯人を絶対に見つけますよ」

班長である、鴉丸と一言交わす。

「班員はこれで全員だつたかな……あれ、そういうえば白神は?」「……柊さんは被害者になりました……」

「梶のこの言葉には怒りがこもつっていた。

「そうか……だつたら許せねえな」

鴉丸が口を開く。

「うちの仲間に手を出すつたあ放つておけねえ、絶対に見つけ出すぞ」

梶の哨戒班も移動を始めた。

式拾参巻／山の治安／

「クソッ！ どこにいやがる！ 犬走、見つかねえか？」
「すみません！ 先ほどから各方向を探しているのですが、見つかりません！」

樺のいる哨戒班は、山全体を移動しながら探していた。

だが、手がかりすら何もつかめておらず、全く進展がないまま、一時間が経とうとしていた。

「こんなに見つからないことなんてあるのか!? もう山は一通り見たぞ!」

移動しながら探していると、目の前に弾幕が張られていた。
班員がとつさに声をかける。

「班長!!」

「だあー！ もうめんどくせえな！」

巻き起こした風で弾幕を消す。

しかし、また弾幕を張られる。

「かかれ！ 今こそ天狗を潰す時だ！」

天狗に不満を持つている妖怪達が騒ぎを聞き、天狗を潰そうと襲い掛かってくる。

「チツ……雑魚共が……てめえらなんぞにかまつてる暇なんてねえんだよ！」

先程と同様に弾幕を消し、指示を出す。

「離れすぎずに、何人かまとめて相手してやれ！ 天狗に逆らつたことを後悔させてやれ！」

「はいっ!!」

それを聞いた班員達は、敵の中に突っ込んでいく。

天狗一人一人の力は強いため、妖怪達は蹴散らされていく。
だがしかし、数が違つた。

一人一人は強くとも、さすがに一度に相手にできる数には限界があ

る。

「チツ……クソッ！ 数が多すぎた！」

「鴉丸さん！　このままだと数で押し切られます！」

勿論、逃げるという選択肢はだれでも持っている。

だが、天狗にはプライドというものがある。こんな下級妖怪なんぞに背を向けて逃げてもいいのか。

プライドが許さなかつた。

逃げていいはずがない。

逃げたとしたら、それはこの下級妖怪共に恐れをなしたことと一緒にである。だから、決して逃げるわけにはいかなかつたのだ。

自分たちのプライドを傷つけないために。

「班員全員に告ぐ！　押し切られないように、死ぬ気でかれ！　そして互いに助け合いながら戦え!!　こんな雑魚共なんかに負けるんじゃないねえ!!」

「はっ！」

各々がスペルカードを使い、敵を怯ませながら剣で斬り倒していく。

ただただ斬り続ける。

「まだまだ続けろ！」

しかし、次第に体力も底をつき始め、集中力も切れしていく。

「あっ……！」

一人が剣を落としてしまつた。

すぐに剣を拾おうとするが、敵に押さえつけられ、上に乗られる。どけようとするが、首を絞められる。

「ツ……！」

隊長がこれに気づく。

「まずい！　誰か助けに行けねえか!?」

聞いてはみるが、やはり自分たちの敵の相手をすることで精一杯のようだつた。

「くつ……！」

だんだんと、どかそうとする力が弱まつていく。

「クソッ……！　何とかならねえのかよ!?」

しかし、叫んだところで現状は変わらない。

「もう少し、もう少しもつてくれ！頼む！」

首を絞められている仲間に聞こえるように言うと、可能な限り敵を離し、助けに向かう。

「そこからどけえ!!」

首をはねようと剣を振るが、

鈍い金属音がなり、剣が跳ね返される。

敵の仲間が剣で攻撃を防いだのだった。

「邪魔するんじゃねえ！」

攻撃をするが、防がれる。

「時間がねえ……もう少しだ！頼む！もう少し耐えてくれ……！」

しかし、限界が近いようだつた。
手から力が抜けていつていた。

(クソッ……！俺は班員を守ることすらもできねえのか……！)

ただ手が地面につくことを眺めることしかできなかつた。
敵の首を絞めていた手が離れた。

(クソッ！俺のせいで……！俺のせいで……！)

そう思つていたとき、首を絞めていた敵が吹き飛ばされ、鴉丸の前にいた敵も吹き飛んだ。

「なんだ!?」

そこには、先程死んだと思つていた班員が立つていた。

「お前……！生きていたのか！」

「隊長、忘れましたか？あたしの得意技は演技ですよ。隊長までひつかからぬでください」

思つてみれば、あの場から助かるには死んだフリをするしかなかつた。

あの状況で咄嗟に判断をし、行動にうつせるとは凄いと思う。

しかしフリでも、やけに時間がリアルすぎて、本氣で死んでしまつたんだ信じてしまつていた。

「まあ、お前が無事で本当によかつた。じゃあ、このまままだいけるか
？」

「ええ、いけますよ」

「じゃあこの辺りは任せたぞ」

鴉丸も、持ち場に戻り、敵を倒していく。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

天狗が総会場に集まっている頃、幻が家を見つけた。
その家はまさに今、あの二人がいる家だつた……。

式拾肆巻／真相

——樺の家——

「柊ちゃん……」

双葉は、どうにかして柊を元に戻せないかをずっと考えていた。だが、なぜこうなっているのか、この状態はどんなものなのかな情報が何も無いため、方法なんて見つかるわけもなかった。

「やつぱり私のせいだ……」

双葉が自分を責め始めた時だった。
家の玄関の辺りで爆発音がした。

「!？」

双葉は柊をなるべく安全なところに連れて行く。

幸い、玄関からの位置は遠かつたため、破片などが飛んで来るようなことはなかった。

双葉は玄関へと向かう。

立ち込める砂埃の中に人影があつた。
ゆっくりとこちらに来ている。

「おっじやまっしまーす！」

そう言つて砂埃の中から出てきたのは、一人の妖怪だつた。
足を止めずに入つてくるが、入つた時には既に、目の前に双葉が立つっていた。

その妖怪は双葉に気づいたようだ。

「あれっ？ この家の中に妖怪がいたんだあ！」

その妖怪は、双葉を見据えてそう言つた。

「あなた何者？」

双葉は率直に聞く。

「僕？ 僕はねえ、夢宮 幻っていうんだ！ でもねえ、さつきから天狗達に名前を言つてるんだけどね、誰も覚えてくれないんだよ。困っちゃうよね！」

幻というやつはそう言つた。

双葉は、今の幻の言葉の中で、気になつたことを聞いた。

「あなたさつき、天狗達に名前を言つてるって言つてたけど、なんのために？」

幻は惜しみなく話しだす。

「いやあ、実はね、今までいろんな妖怪にもやつてきたんだけど、今度は天狗が壊れるのを見たくなつてね。壊すついでに名前を教えるんだよ。やつぱり思つた通り、天狗は一味違つたね。最初はねえ、確か白狼天狗のお姉さんでしょ。次はねえ……」

双葉の耳が反応した。

今の、白狼天狗のお姉さんは柊のことで、こいつが柊ちゃんをあな目に合わせたんだと直感で感じた。

双葉の中で、殺意が沸き起ころ。

今すぐにでも殺りたい。双葉には、その頭しかなかつた。こんなに自慢気に話してきて、尚且、天狗も倒してきただといふこともあるから、腕にはよほど自信があるよう見える。

だが、双葉は感じていた。

この妖怪には、まやかしの強さしかないことが。

双葉には、幻が能力だけに頼つてゐるよう見えていた。幻は、まだ楽しそうに話している。

双葉は、殺氣を悟られぬように幻を呼ぶ。

「ねえ……」

幻は呼ばれたことに気が付き、話をやめた。

「ん？ な n……」

双葉は、幻が話をやめ、こつちを向いた瞬間に思いつきり殴り飛ばした。

幻が家の外まで吹き飛ばされる。

その勢いのまま、大木に全身をうつた。

「やつぱり……」

双葉はつぶやく。

「強い妖怪なら、少しは衝撃を和らげてダメージを減らすはずなのに、あいつは何もしようとななかつた。やつぱり能力が少し強いだけね」

双葉は幻が飛ばされたところに向かう。

双葉の今の行動には、ちゃんと理由があつた。

一つは、今言つたように、相手の実力を知るため。

そして何より、もう一つの理由のほうが大切だつた。

もう一つは、終からこいつを遠ざけるためだつた。

今、家の中で一人という状態も危ないが、あのままあの場所で戦つても、その方が危険性が高いと判断したからであつた。流れ弾にあたつてしまふかも知れないし、見つかれば人質にとられてしまう可能性もあつたからだ。

双葉が幻のところへついた時、驚くべきことが起つていた。

幻が既に立ち上がりつていたのだつた。

「あ！ お姉さんなかなか凄い力持つてるね！ でも、いきなりでびっくりしちやつたよ！」

幻は笑いながら話してきた。

（そんな……嘘でしょ？ 全力とは行かないけど、八割ほどの力だったのに無傷だなんて……！）

ここで双葉は気づく。いや、気づかされた。

（避けられなかつたから喰らつたんじやない……避ける必要がなかつたから避けなかつたのか……！ 試していたのは私じゃなくて、あいつだつたんだ……！）

「白狼天狗のお姉さんと戦つたけど、やっぱりまだ君のほうが少しば暇が潰せそうだよ！ しかし、あのお姉さんはほんとマヌケだつたなあ～」

幻は思い出し笑いをしている。

その言動が双葉を完全に怒らせた。

「あんたを……絶対に許さない……ッ！」

幻はそれを見て楽しみ始める。

「え～？ 明らかに見た目がか弱そうな君が、どうするつていうの？ ねえねえ、どうするのぉ？」

幻は挑発をしてくる。

だが双葉は、自分のことよりも、柊を馬鹿にされたことに怒つてい
たため、幻の言葉など、耳に入つていなかつた。

「絶対に……殺す……！」

式拾伍巻(踏み入れた時)

——樺のいる哨戒班——

「はあ……はあ……これで大方片付いたろ……」

流石と言うべきか、大群で押し寄せてきた妖怪を、數十分で倒していた。

「まつたく……何か起ころるたびにこんな事になつてたら体がもたねえよ……」

全員の顔には疲れが見えていた。

鴉丸がみんなを集める。

「仕方ねえが、少し休まないと体がもたねえろ。五分ほど休憩だ。その後また動き始めるぞ」

「はい！」

全員が声を揃えて返事をした。

休憩中、本来は氣も休めるべきなのだろうが、樺はそわそわしていた。

柊と双葉のことが心配だつたのだ。

今こんな状態の山で、安全である保証なんてどこにもないからだ。

「どうしたんだ？」

仲間に声をかけられる。

「いえ……その……少し気になることがあつて……」

「そうか……班長に言つてこようか？」

樺は一瞬迷つたが、

「いえ、大丈夫です。自分で言つてきます」

それだけ言い残して、班長の所へ行つた。

「あの……班長……」

鴉丸は樺が呼んでいることに気づく。

「ん、どうした？」

「実は……」

樺は、自分が今心配していることを正直に言つた。

「そうか……」

鴉丸は迷うそぶりを見せたが、

「いいよ、こつちは任せとおけ。お前はそれを確認しに行け」

「あ、ありがとうございます！」

樺はお礼を言つた後、すぐに飛んでいった。

樺は急いで自分の家へと向かう。

「どうか無事であつて……！」

樺は不安な気持ちを抱えながら、家に行くスピードを上げた。

しかし、樺が見た光景は、明らかに無事だと言えるものではなかつた。

家の戸は吹き飛ばされたのか、なくなつており、床や壁には穴が空いていた。

「何があつたの……？」

樺の不安な気持ちが膨らんでいく。

「柊さん……！ 双葉さん……！」

樺は家中を探し始める。

数分して、ようやく柊を見つけた。

「柊さん！ よかつた……」

しかし、柊は見つかつたが、双葉の姿が見当たらなかつた。

「双葉さんはどこに……？」

そう考えた時、すぐ隣の森の中から、轟音が聞こえてきた。

「なに……！」

樺は柊を抱えて森の方へ向かつた。

…………

双葉も、柊のことを心配していた。

心配していたからこそ、幻から遠ざけたつもりだった。

だが、壊れた家に、誰も入らないなんて保証はない。

だから双葉は、他の妖怪にやられるかもしれないということが気になっていた。

しかし、この少しの気がかりが、後々、どれほど邪魔なものか、そして、どれほどの後悔を生み出すものなのかは、この時の双葉は、まだ知らない。

式拾陸卷（恐怖）

「絶対に……許さない……！」

双葉は怒りのこもった声で言う。

しかし幻は、受け流すように聞いている。それどころか双葉の気持ちを弄ぶかのような言葉を返す。

「許さないって言つたってさあ、か弱くいお姉さんが僕をどうやつて倒すというの？　冗談やめてよー！」

幻は笑いながら言つた。

そんな幻を尻目に双葉は呟いた。

「私を怒らせたことを……後悔させてあげる……」

「え、何いつて……」

そういつた時、幻の右腕が吹き飛んだ。

「ぐあああ……！」

「さつきまでの余裕はどこいったの……？」

双葉の手には、いつ準備したのか、剣が握られていた。

「うぐつ……ふふ……あはは……お姉さんやつぱり面白いや……」

この状況にしてなぜか幻は笑っている。

「何がおかしいの……？」

「だつて……こんな強気なお姉さんが壊れたらどんなに面白いか……」

幻が目をこっちに向けた。双葉はその目に、一瞬寒気を感じた。

幻は双葉の目を見て言つた。

「想像するだけでも楽しみだからねえ！」

幻は能力を発動させた。

そのはずだつた。

しかし、少し待つても能力は発動されなかつた。

「あれ……なんで!? なんでだ!? なんで能力が発動しない!?

幻が発動させたはずの能力が発動しなかつた。というより、双葉に効かなかつたのだ。

幻にとつて、今までには絶対ありえなかつたことが起きた。

「ただ言つただけで何の意味もないみたいね……大体の能力は、能力者が死ねば解除されるからね……柊ちゃんのためにも、ここで……！」

双葉が剣を振り下ろす。

「クソオオオ！」

幻は咄嗟に、別の効果を発動させた。

剣を振り下ろしていた双葉の目の前に、いきなり氷塊が現れた。

双葉は、反射的に身構える。

しかし、数秒経つても攻撃は来ない。

手をどかして見た時には、氷塊は無く、幻も姿を消していた。

「逃げられちゃつたか……」

双葉は、すぐにでも幻という奴を探しに行きたかったが、その半面、柊のことが心配で仕方がなかつた。

だから双葉は、

(どうせ弱つてるから、放つておいても暫くは動けないだろう)
と思い、柊の元へと急いだ。

「クソッ……！ なんだあの女は！ 僕の能力が効かないなんて……！」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

幻にとつては前代未聞の出来事だつた。

今まで能力が効かなかつた者などいないなか、つい先ほど効かない者が現れたのだから、驚くのも無理はなかつた。

「あの女は早めに潰しておかないと……何か作戦を……いや、その前に応急処置が先決だ」

幻は早々と応急処置を終えると、作戦を考え始めた。

「何か利用できるものがないか……」

ただただ考える。そして、あることに気づいた。

「そういえばあの女、白狼天狗のお姉さんのことと言つた時、過度に怒つていたな……だつたら、そのお姉さんを利用するか……」

幻は薄ら笑いを浮かべると、動き始めた。

【番外編】～冬の月夜に二人の白狼天狗～

「ふわあ～……ん～！　うう、寒い……ここ数日間冷え込んできたなあ……」

布団から出て、外の空気を吸うために外へ行く。
「今日も清々しいなあ～！　……あれつ？」

私はある物に気づいた。

「雪だ!!」

地面は白くなつており、雪が積もつていた。

「わ～！　凄い！　こつちにも降るんだ！」

向こうにいた時にも、雪が降つていたことを思い出す。

「懐かしいなあ～……」

私が思い出に浸つていると、梶さんが外に出てきた。

「雪降つたんですね」

「あ、梶さん！　おはようございます！」

「おはようござります」

梶さんはニコツと笑う。

やつぱり梶さんは美しいと思う私だった。

そういえば、梶さんとゆつくりお話をしたことも無かつたなと思
い、

「梶さんつて、今日何か用事ありますか？」
と聞いてみる。

梶さんは、

「特に何も無いですよ」と言つた。

(それはよかつた)

「じゃあ、今日……」

私が話し始めた時、玄関の方から声がしてきた。

「文々。新聞ですよ～！」

文さんだ。

「あ、文さん。おはようござります」

「文さん、おはようございます」

私と樺さんは、二人揃つて挨拶をする。

「おはようございます。樺と柊」

「文さん毎朝忙しそうですね」

「そうですか？ 私は好きでやっているので、別に苦ではないのですよ」

文さんは笑いながら言う。

「そうなんですか」

その後、文さんと他愛もない話をする。

「……さて、私は次の所へ行かなければいけないので、これで失礼しますね」

「はい、頑張つてください」

そう私と樺さんが言うと、文さんは飛んで行つた。

「では、朝食でも食べましょか」

「そうですね！」

私と樺さんは家の中に入つていつた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

朝食を食べながら新聞を読んでいると、私はある事に気づいた。

「えっ！ 今日つて十二月二十五日なんですか！」

「そうですよ、どうかしたんですか？」

樺さんが聞いてくる。

「樺さんつて、クリスマスつて知つてます？」

「クリスマスですか？ 知つてますよ」

「え！ 知つてるんですか!? 私はてっきり幻想郷にはクリスマスなんて無いのかと思っていたのですが……」

「当初は、私も知りませんでしたよ。でも、八雲 紫が柊さんの居た世界の文化をこつちの世界に広げたため、そこから流行りだしたんです」

「へえ……そうだつたんですか」

(八雲 紫つてそんな凄い人だつたのか)

思い返してみれば、空間を操っている時点で凄いことがわかる。
まあ、この世界の人達自体が普通に凄いんだけど。

能力でどこにでも行けるということを聞いた時には、本当に驚いた。

「ううん……」

私は唸り始めた。

（梶さん、予定が無いって言つたけど、今日クリスマスだし、もしかしたら予定とか入るんじゃないのかな……私、誘わないほうがよかつたかな……）

あれこれ悩む。

そんな私に、梶さんから思いもよらぬ発言が。

「あの、柊さん。柊さんも今日お暇ですよね？」

「えつ……！ あつ、はい。暇です」

「もしよければ、その……私と今日、出かけませんか？」

「えつ……？」

（えつ……？ まさかの梶さんからのお誘い？ え、嘘。ほんと？
ほんと？）

「あ……嫌なら無理にとは……」

「いえいえいえ！ そんなことないです！ むしろ嬉しいです！」

「そうですか。ならよかったです」

梶さんの口調は落ち着いているように聞こえたが、私には、左右に振れる梶さんの尻尾が目に入つた。

（かわいいなあ……）

「で、では、支度しましようか」

「そ、そうですね！」

私も支度を始めた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

私と梶さんは、色々な所へ行つた。

人里へ行き、お互に好きなものを食べたり、あげたり。はたまた、景色が綺麗な、九天の滝という場所にも行つた。そこから見る景色は、言葉では表せないほど景色であつた。目の前に広がるこの世界を一望できる。しかも、二人で見るということで、また違う感覚を味わうこともできた。

他にも、少し遠くへ行つてみたり、雪で遊んだりもした。

その一時は、とても幸せであり、楽しい時間だつた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

次第に日も暮れ始める。

「柊さん。今日はありがとうございました。こんなに楽しかったのは、久しぶりです」

樺さんは今日の出来事を一つ一つ思い出すように目を閉じながら言う。

「私もです……樺さん」

私も今日のことを思い出す。

ゆっくりとした歩調で家へと向かう。

話してから間が空き、樺さんが再び話しだす。

「柊さんと出会つてから、何ヶ月も過ぎました……その一緒に過ごした日々の中でも、柊さんのこともだんだんと分かつてきました。柊さんは、とても良い人だと……」

「樺さん……」

「そして、私は思つたんです。柊さんは私にとつて必要な方。かけがえのない、大切な人なんだつて……」

「だから、柊さん」

桜さんが私の方に向く。

「これからもどうか、私と……私と一緒にいてくれませんか？」

日は暮れており、星々が、そんな二人を照らしていた。

私はただただ単純に嬉しかった。

初めて必要だと言われ、初めて大切だと言われた。

しかも、今自分が大好きな人に。

断る理由なんてない。

「……はい。喜んで！」

二人は、夜空に昇る月の光に照らされながら、手を繋いで、家に帰つ
た。

式拾漆巻く攻守交代へ

樋は柊を担ぎながら、轟音が聞こえた方へ向かつていた。

「もしかしたら双葉さんが……」

目的地に着くと案の定、双葉がいた。

「双葉さん！」

「ん？ あ、樋さん！」

樋は双葉に駆け寄る。

「だ、大丈夫ですか……？」

「うん、私は大丈夫だけど……その、家にいられなくてごめんなさい……」

「…………双葉さんが、柊さんを家に残して出て行くなんて、そんな無責任なことをする人ではないと分かっています。何があつたのですか？」

双葉は説明を始める。

「私が家にいたら、急に扉が破壊されて、夢宮 幻っていうやつが入ってきたの。だから、柊ちゃんに被害が行かないように、離れた場所に連れて行つてからそいつと対面した。その時に、何が目的なのかは勿論聞いた。そしたら……」

「そしたら……？」

「あいつは、天狗を壊すのが目的だつて言つてた。しかもその時に、柊ちゃんのことも侮辱していた……！」

双葉の、幻に対する怒りが増えていく。

「だから私は、あいつとの戦闘に持ち込んだ！ でも……あと一歩のところで私が退いたからとどめを刺せなかつた……」「なるほど……そういうことが……」

「だから私は、絶対にあいつを許さない！ 柊ちゃんのためにも……必ずあいつを殺す……」

双葉からにじみ出る殺意は、樋でさえも怖気づくほどのものだつた。

「と、とりあえず二手に別れて探しようか。そのほうが効率もいいでしょ、私は柊さんを総会場の医務室に運ばなければいけませんから」

「うん、そうしようか。じゃあ、見つけたら何か合図を送つてもらえて嬉しいな」

「わかりました。それでは見つけ次第、お互に合図を送るということです」

二人はそこで別れた。

・・・・・

権は、柊を総会場の医務室まで運んでいった。

医務室には既に、柊と同じ状態の天狗が少数だがいた。

「それでは、柊さんをよろしくお願ひします」

「ああ、任せてくれ。お前も頑張れよ」

「はい」

医療担当の天狗に柊を預け、権は幻というやつを探し始める。「どんなやつが分からぬけどどうやって探せば……」

そんなことで迷っていると、下の方で会話が聞こえてきた。

「僕の名前は夢宮 幻って言うんだ！ やっぱりさ、天……」

幻！ 権はその言葉に反応して、急降下をし、近くの木に身を潜めた。

物陰から、会話をしている人物と幻というやつがいることを確認する。あいつが幻……。

しかし、確認してからもなく、幻は飛んでいつてしまつた。

「なつ……！ どこに行くつもりなの……？」

何をしたかったのかは分からぬが、顔が確認できたことは、権にとって大きかつた。

合図を送ろうか迷つたが、もう少し情報を得るために合図は送らない。

「あとは、どんな能力を使うかさえわからば……」
樋は、幻の後をつけて行つた。

式拾捌巻／進退／

「やっぱり天狗達は一味違うなあ」

幻は飛び回りながら、未だに天狗を探している。

「そういえば天狗じやない厄介なやつがいたけど、あいつには別の策を用意したから、今度あつたら叩き潰してやろつと。それにしても……」

急に幻は飛ぶのをやめ、後ろを見る。

「誰かに付けられてるなあ。こっちが後を付けるのは好きなんだけど、逆に後を付けられるのは嫌いなんだよね」

幻は気配のする方に向かっていく。

「そこにあるの誰？」

幻が呼びかけても返事はない。

「まあ、返事しないのは分かつてたけど、バレていないなんて思つてたの？　僕が分からぬわけ無いじやん。諦めて出てきなよ」

沈黙のまま、時間が過ぎる。

「出て来ないなら、こっちから行くよ」

幻は気配のする木の目の前に立つた。

「ほらっ！　つて、あれ」

幻が覗き込んだところには、誰もいなかつた。

「いつの間に消えたんだ？　まあ、いないならいいか」

幻は身を翻すと、また飛んでいった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「一体あいつは何が目的なの……？」

幻を尾行しながら柵は考える。

先程から同じようなことを繰り返しているだけで、何がしたいのか、何を目的としているのが全く検討がつかない。自分の名前を言つては、すぐにその場から立ち去る。この行動に何の意味があるのか柵は必死に考える。

「だめ……全く理解できない」

そう思いつつ、幻の方を向くと、幻が立ち止まっていた。

柵は不審に思いつつも、幻を観察し続ける。よく見てみると、何かを言っている。

「いきなり立ち止まつて何を……？」

柵は、何を言っているのかを聞き取ろうと、耳を傾ける。

白狼天狗は聴覚、嗅覚がともに優れており、ある程度離れた場所からでも音を聞き取ることができたため、偵察の任務に遣わされることが多い。

だから柵にとつて、尾行は容易いはずなのだが、幻が言っていることを聞き取った時、耳を疑つた。

「そこにあるの誰？」

そう言つた幻の目は、こつちの方角を向いていた。

「能力で見ているから距離はだいぶ離れているはず……なのに、私が後をつけていたことが分かるの!?」

能力で幻を見ると、こちらに向かってきているのが見えた。

今対面すると、確実に負ける……！

幻がどういう人物か、どんな能力を使うのかが分からなく、こちらに全く手札がない状態で戦うということは、最初から勝ち目の無い戦いをすることと同じである。

逃げなきや！ 音を立てずに最速で！

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「危なかつた……気配を感じ取られるなんて……」

呼吸を整え、これからどうするかを考える。

「とりあえずは……あいつを見失わないようにしながら、双葉ちゃんと合流しよう」

柵は双葉に向けて合図を送った。

式拾玖巻／解明／

「どこに行つた、あいつは」

双葉が探している中、遠くの方で樺の合図が上がつた。

「お！ 見つけたんだ！ さすが樺ちゃん！」

双葉は急いで樺の所へと向かつた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「樺ちゃん！」

「あ、双葉さん！」

「幻はいたの？」

「いたのですが、なかなか厄介でして……」

「厄介？」

「ええ、見つけて能力を探ろと尾行をしていたのですが、距離はだいぶ離れており、向こうは一度も振り返つていないので尾行がバレてしまつて」

「だいぶ離れていたのにかあ……」

「結局それで能力も分からずで」

「大丈夫、能力はおおよそ予想がついてるから」

「本当ですか!?」

「うん。あと、なんで尾行がバレたのかも、能力で証明できると思う」

「幻の能力は……？」

「あいつの能力は、幻覚を作る系の能力だと思うわ」

「幻覚を作る……あつ！ 幻覚を前に置いて幻自身は後ろにいれば、振り向かなくても分かる。そういうことだつたんですね！」

「そうだね、尾行が早い段階でバレてしまつていた可能性が高いわね。それでも、戦闘に持ち込んでこなかつたのは……」

「それが幻覚だと分からせないため」

「そうだね、まんまとやられたわ」

「でも、幻覚つて動くものなのでしょうか」

「あいつの幻覚は特別みたいで、私も戦った時分かつたけど、あいつの幻覚は確かに動いていたわ」

「そうでしたか。それならあれが幻覚だった可能性も高いですね。でも……」

「ん？」

「それだけの幻覚で柊さんや他の妖怪をあんな状態にするなんてどうやつたら……」

「そこはあたしも不思議に思っていた。ただの幻覚であんな風にできるわけがない。だとしたら別の何かを使つたのかとしか考えられない」

「別の何か……検討がつきませんね」

「だから困るのよね。相手の手札がわからないと何が起こるかわからないうから」

「何か手がかりが掴めればいいのですが」

その時双葉は、幻が言つていた言葉を思い出した。

「待つて。あたしとあいつで戦つた時……」

「何かあつたんですか？」

「うん。確かあいつは“なんで能力が発動しない!”って言つてた。でもその後、あいつの幻覚に驚かされて、その隙に逃げられちゃつたんだよね。今思つてみるとおかしいんだよね」

「確かにおかしいですね。能力が発動しないと言つているのに、その後は発動している……時間制なのでしょうか」

「いや、あれほど厄介なのに自分の能力を把握してないなんてことはないとと思う」

「では他に何が……」

「能力が二つ……なんてことはないか、流石に」

「二つ……双葉さん、幻覚にもいくつか種類があるので？」

「どういうこと？」

「先ほど、双葉さんが幻の能力を説明している時、私と双葉さんで考えていた幻覚の見せ方に違いがあり、話がつながつていませんでした。ですから、幻覚の見せ方にも種類があり、私や双葉さんが先ほど受け

た幻覚とは違う種類の幻覚の見せ方があるのでないのでしょうか

「あ、なるほど！ 梶ちゃん頭いい！ 多分そうだね。よし、相手の能

力は大方分かつたことだし、柊ちゃんを戻すために行きますか！」

「ええ、行きましょう」

参拾巻く動き出す歯車く

幻の能力がどんなものなのか予想がついた樋と双葉は、幻を探し始める。

「今度こそ、絶対に……！」

「倒しましよう！」

「見つけた！」

百メートルほど先の所に幻がいた。双葉が奇襲をかけんとばかりに近づこうとしている。それに気づいた樋は双葉を止める。

「待って下さい！ あれが創りだされた幻覚の可能性があります。ここは一旦見きわめてから攻めましょう」

樋の言葉に双葉は我にかえる。感情任せになっていたようだ。

「そうだね、一回様子を見よう。ありがとう、樋ちゃん」

幻かどうかはまだ判断は出来ないが、その周りやそのずっと後ろの方向も見た。しかし、幻と思われるような姿はなかった。

「多分あれは本物だろうね」

「恐らくそうでしょう。ですが何か……」

「どうかした？」

「何か腑に落ちない気がして……」

「いやでも、樋ちゃんの能力でくまなくあの周りを見たから大丈夫だと思うよ！」

「そうでしようか」

「うん。そうだよ！ だから早く柊ちゃんを救わなきや」

そう言い終えた双葉が飛び立とうとした瞬間だつた。

後方から殺意のこもつた攻撃が飛んできた。

「双葉さん！」

梶が素早く反応し、攻撃を受け止める。

「ぐつ……！」

「も、梶ちゃん！」

咄嗟のことで、全ての攻撃を防ぎきれずに受けてしまったようだった。

「止血して処置しなきや！」

止血しようとした時に梶が、『梶と双葉がいたところの後ろの方』を睨んで言つた。

「……やはりそこにいたんですね、幻」

梶が睨んだ先には幻がいた。

「そうだよ。よく気づいたね。気配は消していたつもりだつたんだけどな」

「あんな殺意のこもつた攻撃されたらそりやあ気づきますよ」

「そんなこと言つても説得力ないし、そもそも自分達の周りに不注意すぎるね」

「やはり裏をとられていたのは私達の方でしたか」

「それで何？ 僕に何の用だい？」

「あなたの能力でやつたこと、全部戻しなさい！」

双葉は割つて入つて言う。

しかし幻は舌を出してバカにしたように言う。

「やうだね～」

だが、梶と双葉は了承してくれないことなど期待はしていなかつた。

「それならば、無理にでも……」
「力づくで……」

「倒す!!」

「倒します!!」

「いいねえ！ 退屈な僕を楽しませてくれよ！」

お母さんとお父さんが死んでいくところを思い出すと胸が苦しい。何日も泣いていた。過去を見て、自分がどんなだったのかも分かつた。でも、戻ろうとしても何かが私を引き止める。いや、私が過去から離れるのを拒んでいるのか、または両親を忘れてしまうことを恐れているのだろうか。どちらかは分からないが、なんにせよ心が苦しい……。

そう思つても過去は繰り返される。また同じ景色を見るとなると、それでさえも精神が滅入つてしまいそうだ。

だが、私の思考なんてお構いなしに過去は始まる。

けれども、今回は何かが違つた。私は変化に気づき、過去をよく見てみる。

出された景色は、葬式だつた。

参拾壹巻／無力／

(なんで葬式……?)

不思議に思いつつ、過去を見る。

それはちょうど葬式が終わり際から始まつた。

両親の写真が木でできた棺の後ろ側に置かれている。その棺の横を通る人達が花を添えて、最後に何かを述べてから通り過ぎていく。その流れをよそに、幼い私は涙をぼろぼろと流しながら泣いている。周りの人達は気を遣つてくれていて、私をそつとしておいてくれたり、励ますような事を言つてくれていたことに今になつて気づいた。「そうだ、この時私……いろんな人達に助けてもらつたんだ」

周りの人達の親切な行動に心が温まる。そして、気付かなかつたがここまで助けられていたことに気がつく。

(私も行かなきや……榊さんや双葉ちゃんのために……)

しかし決意したのはいいが、肝心のここからぬけ出す方法が見つからない。どうすればいいか考えていると、どこからともなく声が聞こえてきた。

「なんだ、過去を見て変わつちやつたんだ？」

「この声は、幻!？」

「ふつふつふ、ご名答～！」

そう言うと、暗闇の中に急に幻が現れた。

「早くここから出して！」

「まあまあ、そう焦らないで。そうだねー、出してもいいけど、その後どうするのさ?」

「え?」

「だから、出た後どうするのさつて聞いてるの」

「そんなの決まつてるでしょ！　榊さんと柊さんの所に行つて助けになれるように頑張るの！」

「口では言うの簡単なんだよねー。本当にできるの？」

「できるかじやなくてやる！　やるの！」

「ほんとに？ 今までできなかつたのに？」

「…………」

「散々足を引っ張つて、仲間の白狼天狗に重大な怪我を負わせておいてよく言うよ」

「…………う」

「お前のせいでこんな大変なことになつてるのにな！」

「…………がう……」

「いいかげんに時分が無力だつてことに気がつけよ！」

「ちがうちがうちがう！」

「違く無いね！ そうやつてまた何かから逃げるんだ！ 自分の無力さを認めないで！」

「いやあ！」

「もう諦めちまえよ！ 何やつても無駄なんだからよお！」

「ちが……」

—— そうだ、違うんだ。

「…………たとえ自分が無力でも、誰かのために動くのは決して無駄なことではない。無力というのは、諦めて何もできなくなつたことを言う。そうおばあちゃんが言つてたつけ。今思うと不思議だけど……。

それに私はあの時に決めた。恐怖で何もできないより、恐怖に打ち勝つことができるほど強くなつて何かを守れるようになりたい。

だから私は……仲間を守るために、何度も立ち上がる!!

真っ暗な空間に突如ヒビが入り、光が差し込む。

「そ、そんな馬鹿な……！ 能力が破られるだと!? クソツッ！」

幻は暗闇に消える。

その刹那、空間が崩れ、まばゆい光に包まれた。

次に目を開けた時には、そこは総会場の医務室だった。

「なんで私はここに……幻と戦った後からの記憶があまりない……でも、暗闇の中でのことならある程度憶えてるということは……」

そこに医務室の天狗がやつてくる。

「き、き、君、意識はあるのかい……？」

「ええ、大丈夫です。あります」

「こりやたまげた。まさか自分で治してしまうとは……って、君！」

「どこ行くんだい！ 安静にしてないと！」

「すみませんが、行かせて下さい。休んでいる暇なんて無いんです。

仲間の所に行かなければいけないので」

参拾式巻／未来／

「くつ……強い……！」

二対一で戦っているはずなのに、一人とは思えないほどの強さで権と双葉の相手をしている。

「その程度か！ それで僕を倒そうなんざ百年早いね！」

幻は殺傷弾を雨のように降らせてくる。

「双葉さん、これではダメです。一度範囲外に出ましよう！」

一人は殺傷弾の降る範囲外に移動をした。

「あいつに体力の限界はないの!? さつきからあんなに降らせてくるのに！」

「……私の考えですが恐らく、あれの全部が全部本物とは限らないはずです」

「どういうこと？ 権ちゃん」

「普通、あんなに殺傷弾を降らせていれば体力の消耗が激しいのは勿論、山への被害もも大きいはずですが、先ほどから見ていても被害が小さすぎます」

「なるほど！ ジャアとりあえず斬つていけば本物か幻覚か見分けがつくんだ」

「そうなんですが、奴は近づかれたりなどをされた時、すなわち向こう側にとつてチャンスだと思つた時になつたら必ず実弾を使つてくるはずです。そこには注意をしなければいけません」

「そうなつたら、二方向から攻めれば少しは迷わせるともできるかも知れないね」

「気を惹きつけられればいいのですが……もう一つ疑うべきことが……」

そこで二人の目の前に実弾が落ちてきたが、うまくかわして別の場所へ移動する。

「あまり時間がないですね。それで、もう一つ疑うこととは幻本体です。幻覚弾を打ち出すだけの幻を作つておいて、そこに少しづつ実弾を混ぜているということも考えられます」

「ん……？　どういうこと？」

「幻自体が幻覚で、幻覚の弾を撃ち出していて、そこに本物の幻が少しずつ実弾を紛れさせているかもしないということです」

「それだと幻がどこにいるかわからないのか」

「そうです、それが厄介なんです。どうにかしてどちらの線が濃厚かわかれればいいんですが」

「まあ、とにかく殴ればわかるんでしょ？　私には能力が効かないみたいだし」

「……ふふっ。そうですね、やりましょうか」

双葉と樺は互いに逆方向を向き、走り出す。そして、幻を二方向から襲える位置に来ると、二人は息を合わせて幻に向かつて飛ぶ。

「はあああ！！」

「それなら僕が迷うつて寸法かい？」

そう言うと幻は両方の攻撃を受け止めた。

「そつ……」

「そんな……」

「言つただろう、百年早いつて！」

幻は二人を地面に向けて振り下ろす。地面に叩きつけられた衝撃で大量の砂埃が舞う。

「う、ぐつ……強い……」

「どこからそんな怪力が……」

幻が一人の前に下りてくる。

「真っ向から僕を倒すなんてやめたほうがいい。絶対に倒せない」

「願つたり叶つたりですね。わざわざ来てくれるなんて！」

樺のその言葉で、突風が巻き起こる。

「これは、砂か！　クソッ、視界が！」

さきほど舞った砂埃を樺が突風で巻き上げ、幻の視界を奪つたのだ。

「倒せるか倒せないなんて、まだ決まってないのに決め付けないでく

ださい。誰かに、先を決められてる未来なんて嫌です。私の未来は私で決める……あなたが決めるものじゃない！　私は、いや……私たち
は貴様を倒す！」

参拾参巻／疑い

「もういいわ……。お前ら仲良くあの世に送つてやるよ！」

権と双葉は身構える。

『『ファンタム・サブスタンス』!!』

そう唱えた幻の周りに投げナイフが並び始めた。

「何をする気なんでしょうか？」

「まあいいよ！ 今まで幻覚しか使つてないから、どうせあれも幻覚よ！ さっさと攻めてしまえば終わり！」

「待つてください！ まだそれが幻覚とは確認していないのに！ 危険です！」

双葉が幻に向かつていくと、幻は投げナイフを双葉に向かつて投げる。

「あんたもマヌケね！ 敵の前で幻覚を創り出すなんて！ こつちはもうわかってるな……」

鈍い音が脳内に響く。

「えつ……？」

一瞬何が起こったのか理解できなかつた。

「な、んで……？」

幻覚だと思い込んでいたナイフが双葉の左足に刺さつていた。

「え、う、うそ……。あ、ああ……」

足の力が抜け、同時に体の力も抜けていく。そしてようやく、脳が何が起こったのかを理解して、体が痛みを感じ始める。

「いつ、あああ…………！」

「双葉さん！」

もう一本のナイフが飛んできて、双葉の右腕を直撃する。

「きやああああああ！！」

痛みに叫んだ双葉が落ちてくる。

権は何とかして受け止めようと急いで落下点に移動する。しかし、

あともう少しというところで見えない壁に激突した。

「なんで壁が…………！」

そして双葉が落ちてくる。

「双葉さん!!」

「う、ああ……」

何とかまだ意識があるので一安心したいが、そんなことをしてい
る暇などない。

櫂は何とかして壁を壊そうとする。

しかし、攻撃が通っているような手ごたえはなく、びくともしない。
剣の切れ味が落ちるばかりで、だいぶ刃こぼれもしてきていた。

「双葉さん！ 大丈夫ですか！」

声なら届くかと思い、大声で呼びかけてみるも、音すらも遮断され
ているようだつた。

助けたいのにどうすることもできないまま、壁抜こうから双葉を見
ていた時、いつの間にか、幻が双葉の前にいた。

「幻!? まざい！ 双葉さん！」

その呼びかけも虚しく、幻の行動をただ眺めていることだけしかで
きなかつた。

ただ、その幻の起こした行動に、櫂は目を見開いていた。そして、こ
れ以上とない怒りを見せるほどの行動だつた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

双葉はいたみをこらえ、なんとかして足のナイフを抜こうとしてい
た。とにかく退くことが優先だと思つていたのだろう。

少しづつ少しづつ抜いていた。

が、

はつとして顔を上げると、幻が何食わぬ顔でたつっていた。

「なつ！ 来るな！」

そんなことを言うが、幻がそんなことを聞いてくれるわけがない。

ぐいぐいと近づいてきて、双葉に近づくとこう言った。

「抜くのに困つてゐるのなら、僕が引き抜いてあげようか？」

双葉の背筋に悪寒がはしる。

(何を考えてるの……やめて、そんなことしたら……!)

幻が双葉の左足に刺さっているナイフに手をかける。

「や、やだ……。やめて、お願ひ……お願ひだから……それはやめて

……！」

どうなるのか想像するだけで、涙が出てくる。

痛みが怖いのももちろん。こんなやつに弄ばれている未来がどうなるのかの恐怖もあつた。

幻のナイフを握る力が強くなる。

「やだつやだつ！ やめてお願ひ、お願ひだから！ いやつ、いやつ……いやあああ！」

幻は一度ぐつとナイフを押し込むと、一気に引き抜いた。

双葉は痛みのあまりに、悲鳴を上げることなく失神してしまつた。

「やつぱりいいね。恐怖に歪む顔は。しかも、ちょうど僕の一番の能力が効かなかつたやつだから都合がいい」

棍のほうに向き直る。

「確かにこの女が言つていたこともあたりだ。僕がさつき発動した技は、幻覚を本物にする技。細かく言えば、僕が幻覚で創り出したものを、僕が本物だと思えば本物になるし、幻覚だと思えば幻覚になる。さて……」

「次はお前だ」

・・・

(幻の能力がまだ他の人にも続いているということはまだ幻は生きている。だったらこれ以上被害を増やさないためにも何とかしなきや！)

とは言つたものの、どれくらいの時間が経つたのか、今山がどうい

う状況なのかもわからない。ともかく、樋さんと双葉ちゃんを探すこととした。

「そろいえば、どうして私医務室にいたんだろう」

その他不思議に思つたことについて考えながら樋さんの家に向かつた。

家に着いたとき、あまりの惨状に私は絶句した。玄関はほとんど原型をどどめておらず、扉が離れたところに落ちている。家の中は物というより、家の部品が散らばっていたり、柱が折れて倒れていた。

「なつ、なんでこんなことに……？」

家の現状に呆気に取られるが、はつと気づく。

「樋さんと双葉ちゃんは!?」

もし家にいて被害をを受けていったらと思うと不安になつてきて、家の中を探し始める。しかし、その心配も杞憂に終わり、幸い樋と双葉はその時に家にいなかつたようだ。

ほつと胸を撫で下ろす。

「でも、どっにいるんだろう。とにかく急がなきや」

そのとき、遠くの方で大きな音が聞こえた。

参拾肆巻／罪とは／

とにかく許せなかつた。たつたひとつの壁を壊すことのできなかつた無力な自分と、幻がやつしたことの二つのことに対して。

権はもう我慢の限界だつた。冷静さを失い始めた権は、無我夢中に剣を振る。

幻は後ろに下がりながら左右にかわしたり、受け流している。

「なんでそんなにムキになつてるんだよ。別にお前に直接被害はないのに」

「私に直接被害があるかどうかなんて、関係ない！　私の大切な仲間を傷つけた！　だから！」

「へえ、じやあ目の前にいたのにどうして助けられなかつたのかね。俺の壁があつたから？」

「うるさい！　黙れ！　私欲のために動いてるお前とは違う！」

幻は剣をかわしながら続ける。

「お前のそれだつて、私欲じゃないのか？　私が仲間になつてあげているから仇を撃つてあげないとつていう私欲が」

「違う、違う、違う違う！」

権が剣を振り回す。しかし、その動きを見きつた幻が権にケリを入れる。

「うぐつ、げほつ……」

「結局最後まで無力だつたな。自分の感情すらもコントロールできないで、ただ感情任せになつて剣を振り回していただけだつたし」

権は立ち上がりつて幻に向かつて走つていくが、あつさりかわされ、また蹴飛ばされる。

「あの世で守れるように頑張りな」

幻は双葉に刺したようなナイフを取り出すと、権めがけて振り下ろした。

（やつぱり私は……）

そう思つていた矢先、

「はあああ！」

「なつ……！」

突然幻の横から剣が飛んできた。その剣は、幻の持つているナイフをはじき飛ばした。

「くつ……馬鹿な、なんでお前がここにいる!?」

樺が顔上げるとそこには、柊が立っていた。

柊は剣を鞘に収めながら、幻を睨みつけて言う。

「あんたにはまんまと一杯食わされた。人の記憶を好き勝手して何が楽しいだ……！ 絶対に殺す！」

柊は幻の奥を見て言う。

「樺さん！」

その刹那、幻は振り返った。だが、そこには樺の姿はなかつた。はつと氣づき、すぐさま前を向く。だがそこにはもう既に、柊の姿は見えなくなつていた。

「ど、どこに行つた!?!」

当然これは、柊の移動速度などではなく、柊の能力が発動しているだけだつた。だが、幻は柊の能力はいざしらず、ただただ見えない攻撃に耐え続けるしかなかつた。

「クツッ……！ 卑怯だぞ！ 出てきやがれ！」

柊は姿自体は見えるようにしたが、幻の前には姿を見せず、声だけで返答する。

「卑怯なのはどつちだ。罪のない妖怪までも深刻な状態に落として、さらには私を受け入れてくれた天狗の皆さん。そして、樺さんと双葉ちゃんにこんなことまでした。全員に対して一方的に。それが卑怯だつて言つてんの！ ……卑怯者には卑怯で死ぬのが一番。目には目を、歯には歯をと同じよ！」

「…………あなたはもう『つみ』よ！」

参拾伍巻／助け合い／

私はまた姿を消し、幻の周りを移動する。

「クソッ！　あいつはどこだ！」

幻がキヨロキヨロと周りを見る。しかし、そんなことをしても私を見つけることはできない。幻は自分の体を中心にして、ナイフを円形に並べた。その後、手を下から上にあげる仕草をした。

私はただそれを、幻には見えないようにしながら、木の上から眺める。

とりあえず奇襲をかけてみようと、刀を抜いて切りかかつてみる。しかし、何か見えない壁に阻まれてしまふ。その何かと刀によつて出された音によつて、幻が音のした方に反応する。

「そこか！」

ナイフを次々と飛ばしてくる。

だが見えないため、少し横に動くだけでかわすことができる。

ただ、幻はそれで場所を把握したつもりなのか、その方向を向いて集中し、力を溜めている。

私は幻が何をしたいのか分からぬけれど、これほどの好機は無いと思い、刀で攻撃しようとする。

しかしその時、幻が私の方を向いた。

「分かっていないとでも思つたか！　姿は隠せても気は隠せないみたいだな！」

私はもろに幻の攻撃を受けてしまう。それと同時に透明化も解除されてしまう。

「全く……。お前の能力には驚いたが、使いこなせないようなら俺の眼中にもねえ。また前と同じようにしてやる」

幻が以前と同じように私に能力を使おうとする。しかし、どこからかクナイが飛んできた。

「ん？　なんだ？」

幻が、クナイの飛んできた方を見る。私はその隙をついてまた能力を発動する。

もちろん私には誰が飛ばしたかなんて分かっている。

「なんだ、まだ動けたのか」

私は今助けてもらつた。今度は樺さんが狙われている。なら次は私が力になる。

樺さんの方向を向いて、幻は話している。

私は幻の見えない壁を壊すため集中する。昔聞いたことがあつた。全てのものに核というものがあつて、ある一点に集中して攻撃すると硬くても壊れるというのを。

時間がない。一発で成功させなければ終わりと思つた方がいい。

刀の先を意識して、もう一度集中する。焦りは禁物だ。

刀の先が止まつたと思った瞬間、私は壁に向かつて刺した。

見えないが、何かが崩れ落ちた音がした。今この瞬間を逃したら、またバリアをはられてしまうかもしれない。私は無理矢理、刀を幻の首の所に持つていき首を切り落とした。

しばらくして、幻の胴体が倒れ、首は体の近くに転がつていつた。私は能力をといて樺さんの方を見る。樺さんは口を開け、驚いているようだつた。

「樺さん、大丈夫ですか？」

私の呼びかけに答える。

「ええ、大丈夫です……。柊さんだけで倒してしまってん」

「樺さんのおかげです。あそこで気を引いてくれなければ私も死んでしまつっていたかもしませんし。とにかく医務室に行きましょう」

そういつた時、樺さんが思い出したように言つた。

「そうです！ 双葉さんが！」

「あ！ 双葉ちゃんはどこ?!」

私が双葉ちゃんを探そと辺りに視線を向けた時……。

私は血を吐きながらその場に倒れた。

参拾陸卷く空く

「ひ、柊さん!?」

柾は何が起きたのか理解できなかつた。

「まさか、幻!？」

幻が死んだであろう場所に目をやるが、幻の死体は変わらずにそこにあるつた。

「幻じやないとしたらなんで……いや、とりあえず医務室につれていかなきや！」

柾が急いで運ぼうとした時、何もない場所から声がかかる。

「待ちなさい」

柾が声のかけられた方をみると、空間が歪み、八雲紫が出てきた。

「なんで、八雲が……」

「なんでつて、その子がそんな状態だから来たのよ」

紫は幻の死体を空間に片付けながら言う。

「率直に言うわ。その子、柊はそう長くはもたないわ」

「なつ……なんてことを言うんですか！ そんなことあるわけがないじゃないですか！」

「考へてもみなさい。人間の体でここまで持つたことが凄いと思うわ。負担が大きすぎたのよ。短い期間で連續して妖怪の相手をして……人間の体にただの妖狼の気がまとつているだけなのよ。普通だとこんなに力は出ないわ。なのにこんなにも力があつたのだから、筋肉へのダメージも大きいはず。合わせれば並大抵の負傷じやすまいわ。この吐血はほとんど終わりの前触れだと思つてもいいわ」

「じゃあ、どうしたらたすかるんですか……」

柾の質問に対し、紫は何故か黙つている。

「なんで黙つて……つ！ 助ける手段が無いつていうんですか……？ このまま見殺しにしろと……？」

紫は黙つてゐる。

「そう、ですか……だつたら」

柾は飛び立ち、

「何もしないよりは何かをした方がいい！」
あなたと話している時間
が無駄だつた！」

総会場の方へと飛んでいつた。

「……失敗したわねー。黙つていれば、永琳が間に合うと思ったのだけれど……行動派だつたのね。まあ仕方ないわ。後を追いましょ」スキマを開く。

「永琳の様子を見てからでもいいかもしねないわね。」
そう言うと、紫は空間に消えていった。

THE JOURNAL OF CLIMATE

「柊さん、待つていて下さい。もうすぐつきりますから」

最短距離で医務室に向かふ

医務室の天狗は勢いよく入つてこられて驚いたようだが、すぐに冷靜さを取り戻すと、薬の方こ近づいてきた。

「とりあえずその子を、」

格を布団の上に下ろし、その横に一人は座る

「抜け出したが子じゃないか大からあればと言つたのは……」

いらない血を吐き出しかけて、それで

ためらつたのである。

それで？」

いえ、なんでもないです。すもません、気持ちが高ぶつてたみた
いです。

「いや、いいんだよ」

「しかしこれはどうしたものか……治療は――――――

医者が続きを言おうとした時、廊下から声が聞こえてきた。

「どいてどいて！ 桜ちゃんが大変なんだから！」

榎は、終に必死で完全に存在を忘れていた。

「柊ちゃん!?」

双葉だつた。

「双葉さん！ 大丈夫だつたのですね。怪我は……？」

「うん、無事だつたよ。怪我はね……目がさめたら八雲が目の前にいて、あなたひどい怪我ね。神社のことは今回は免じてあげるから、とりあえず今は怪我を治しなさいって言われて、治してもらつたの。そんなことろり、柊ちゃんは!?」

双葉が布団の上に目を向けた瞬間、表情が変わつた。

「嘘……死んで、る……」

樺もいわれて目を向ける。気づいてはいけなかつた。むいてはいけなかつたのに、体が動いてしまつた。そして、認めざるをえなくなつた。

柊の体から、妖気が感じられないのを。

参拾漆巻く思い

双葉と樺は動けなかつた。

頭ではそのことを理解しようとしている。勝手に脳が働くのだ。
「そんな、うそ、ですよね……？」 樺さんが死ぬわけ、ないですって
……」

双葉も同じだろう。

どうしても信じられなかつた。自分たちを助けてくれたというのに、なぜ助けた本人が一番の悪を背負わなければいけないのか。

「う、うう……樺、さん……」

樺は泣いていた。それにつられて、双葉も泣いていた。

もう樺とは話すこと、一緒に仕事することもできない。

辛い現実が二人の目の前に突きつけられた。

「やだ……いやだよ……樺ちゃん……」

ただ樺の名前を呼ぶことしか出来ない。

「ほんとにもう、手間かけさせるわね」

聞き覚えのある声に、二人は振り返る。

そこには、八雲 紫がいた。

「八雲!? なんでそこにある！」

樺は警戒して剣を抜く。

「だからそう早とちりしないの。あなたたちのためにきたんだから」「それはどういう……」

樺が聞き返そうとした時、紫の後ろから八意 永琳が出てきた。
「紫に頼まれて、薬を作つてきたのよ」

そう言いながら、小瓶を取りだした。

「その薬は……？」

「この薬は簡単に言えば蘇生薬よ。ただし、蘇生薬と言つても完全なものではないわ。あくまで試作だし、何より、試したことがないの。前から研究はしていたけど、作つてみたのなんて本当に初めてなんだから。絶対に生き返るという保障はできないわ。それでもいい?」

権と双葉に断る理由はなかつた。

「はい。お願ひします」

「ちよつと待ちなさい。一つだけ言わなければいけないことがあるわ」

紫は一呼吸おいてから言つた。

「もし蘇生が成功したとしても、恐らく、柊は白狼天狗ではなくなつてしまふわ」

「え……？」

「実は、前に逃げ出した狼の靈が、その子にとり憑いていて、その子の中で、その靈を飼つている状態なの。だから、中の狼が消えれば、憑依も解けて元の姿に戻つてしまうの。ただでさえ、その靈は衰弱しているのに、あの激しい戦いの連続で、もう消える寸前なはずよ。そこに、身体を再始動させるためのエネルギーを使つたら、完全に消えるわ」

「そんな……」

「それでも、いいの？」

ここまで言われても、結局二人の意見は変わらなかつた。

助けてもらつたこと、今まで楽しくしてくれたこと。それを考えれば、迷うことなんて一つもなかつた。

助けてもらつたことへの、心からの感謝を伝え、また柊といつも通りに生活を送りたい。なにより、柊にもつと楽しんでもらいたい。

これらは自分勝手なことかもしれないが、もう一度柊と話したい。それが彼女たちの一番の願いだつた。

二人はゆつくりと頷いた。

参拾捌巻／運命／

「わかつたわ。永琳、お願ひ」

「承つたわ」

そう言うと、永琳は柊に近づき、瓶に入った液体を柊の口の中に流し込んだ。その刹那、柊の体がほのかに光りだした。

「あつ」

いち早く変化に気づいた樺が声を上げた。

「柊さんの耳が……」

光が、柊の上に集まっていく。姿が人間へと戻ろうとしていた。

「……っ」

双葉は何も言わなかつた。

やがて光は収束し、ゆっくりと天に向かつて消えていった。

「う……ううん……」

あれ、ここは……？

「柊さん！」

呼ばれた方に顔を向けると双葉ちゃんと樺さんがいた。

「あれ、私、どうして……」

だめだ、頭がぼーっとしてて何も考えられない。

「良かつた！ 生き返つた！」

生き返つた？ というより、なぜかいつもより声が小さく聞こえる。

「あの、生き返つたってどういう……」

「全く、無茶するからよ」

「紫……なんでここに」

「あなたは死んだのよ、一回」

「え、死んだつて……じゃあなんでいきてるの……？」

「それは永琳の薬のおかげよ。あなたの体、もとは人間なんだから、あ

んな連戦で妖力使つてたらその元の靈も消えちやうわよ

「消えちやうつて……」

急いで頭に手をやる。

そこには、いつもあつた耳は無くなつていた。

「じやあ私は今……」

「そうよ、人間に戻つてしまつたの」

過去の私なら喜んでいたのだろう。ただ、今の私にはショックとしか言えなかつた。

もしかして、もう一緒に闘えないのだろうか。そんなことが頭をよこぎつた。

「とにかく、回復したてなのだから今日は休みなさい」

そう言うと、紫は出ていった。

あれ、急に眠けが……。

「柊ちゃん？　あれ、寝ちゃつたのか。じゃあ私達もとりあえず今日のところは帰ろうか」

「そうですね、柊さんの妨げになつてはいけませんし」

そう言つて、全員帰つていつた。

「おい、犬走」

呼ばれた先には、大天狗がいた。

「なんでしよう大天狗様」

「柊が人間に戻つたということは真なのか？」

「そうですが、それをどこで？」

「つい先程、八雲から聞いたのじや。まあそれはどうでもいいのだが、

…………

柊が人間になつた今、一つ問題が出来てしまつた

一呼吸おいて、大天狗は言つた。

「犬走、天狗界の捷は知つておるな？」

「はい、存じています」

「山は天狗のテリトリー。だから、たとえ共に鬪えど、種族が違えば山から追い出さねばならぬ」

「……はい、分かつています。ですが……」

「これは今まで守られてきた伝統じや。それを一人の欲望のために崩さなければいけないのか？　またこれは、柊の為でもある。人間という身で山にいたとしても、山には人食い妖怪などたくさんおる。ろくな外出などできなくなるだろう。そうすれば、ずっと屋内にいることになる。いや、もしかしたら家を破壊してまで喰いに来るやつも出てくるだろう。お主はそれらから柊を守れるというのか？」

「それは……」

「しかたがないのだ」

「でも、とりあえずは今日は！」

「今日はしようがないから、別によい。ただ……明後日までには、山への未練を切らせ、柊を人里へといかせるのだ。わかつたな？」

「…………はい。わかりました」

参拾玖巻／別れ

「あれ、私何してたんだっけ」

あまり開かない目をこすりながら、昨日のことを思い出す。

「そうだ、私人間に戻つたんだっけ」

あまり実感がない。いろんなことが目まぐるしくすぎていつて、いちいち整理する時間がなかつたからなのかもしれない。

「まあ、いつか。思い出したいときに思い出せば。それより、能力つてまだ使えるのかな」

前と同じように、昔を思い出しながら能力を使おうと試みた。

「あれ、使える」

意外にもまだ能力だけは使えるのだとわかつた。ただ、

「人間の体つて重く感じる……。これじゃあ妖怪の時みたいに動き回れないなあ」

ああ、柾さんの助けになることが出来ないのか。

そんなことを考えていると、柾さんが入つてきた。

「柊さん、体はもう大丈夫ですか？」

「ええ、だいぶ楽にはなりました」

「そうですか。ならよかつたです」

そう言つてる柾さんの顔は、言葉とは裏腹にどこか悲しそうだった。

「柾さん、どうかしたのですか？」

「……その、柊さんに伝えなければいけないことが……」

「……なんですか？」

私は何を話されるのがわからないまま話しを促す。

「天狗の撃上、天狗以外の種族は山に住んではいけないので。ですから、人間に戻つてしまつた柊さんはもう山にはいられないんですね……」

柾さんの表情が次第に曇つていく。

「……そんなのつて、おかしいですよね……。だつて、いくら短い期間だつたとはいえ、私たちは共に戦つた仲間です！ それなのに、種族

が変わつてしまつただけで一緒にいられないなんて、そんなの、そんなの……！」

権さんの目には涙が浮かんでいた。

それをみても、私は冷静でいられたことが不思議だつた。なぜかは分からない。権さんと離れてしまうことは寂しいことだ。だけどもそれは私にはどうしても必然のような気が前からしていたようにも思えていた。

「権さん、私も悲しいです。ですが、やつぱり私だけの都合で権さんに迷惑をかける訳にはいきません」

私がそれを言うと、権さんは驚いたような顔をしていた。

「どうかしましたか？」

「あ、いえ、大天狗様も同じようなことを言つていたので」

「あ、そうでしたか。でしたらなおさらです」

「柊さん……」

「では、すぐに支度しますので」

この時、権さんを見てしまうと心が変わつてしまいそうで怖かつた。

……………

私は支度を終え、権さんの家を出る。

「それでは、今まで本当にありがとうございました」

「…………本当にごめんなさい…………」

「権さんが謝ることではありませんよ」

「ここからまつすぐ進めば人里に出ます。そこからは本当に申し訳ないのですが私はお力添えが出来ません」

「いえ、大丈夫です。本当にありが……」

「柊ちやーん！」

聞き覚えのある声が聞こえてくる。

「双葉ちゃん！」

「柊ちゃん、どこいくの？」

「人里に」

「え!? なんで!？」

私と樺さんはここまで経緯を話した。

「そなんだ……。人里だと私もあまり入れないからなあ……。会う

機会も少なくなつちやうね」

「そうだね。でも完全に会えないわけじゃないから」

「そうですね、では——」

今まで言う必要は無かつた。その内容はお互いわかつていたから。もし再び会うときがあるとすれば、運命が、この世界がそうなるように仕向けるだろう。
それまでは——。